



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学応援団の組織と文化の変容：周囲の学生とのかかわりを中心に
Author(s)	坪井, 望
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94307
Type	bachelor thesis
File Information	2024tsuboi.pdf



令和 6 年度卒業論文
北海道大学応援団の組織と文化の変容
～周囲の学生とのかかわりを中心に～

人文学科 人間科学コース 地域科学研究室

指導教員 宮内 泰介

学 生 番 号 01192148

氏 名 坪井 望

内容

1 研究概要	3
1-1 研究の背景と目的	3
1-2 研究対象	3
1-3 研究方法	5
2 北海道大学応援団の歴史	7
2-1 大学予科（旧制高校）	7
2-2 北海道大学応援団沿革	8
2-3 発足：明治 11 年～昭和 2 年	9
2-4 予科応援団：昭和 2 年～昭和 24 年	10
2-5 北海道大学応援団：昭和 26 年～現在	11
2-5-1 活動の縮小：昭和 26 年～昭和 30 年代前半	11
2-5-2 改革の時代：昭和 30 年後半～昭和 40 年	11
2-5-3 現在：昭和 50 年代～現在	12
3 周囲の学生との関わりに伴う活動・服装等の変遷	13
3-1 周囲の学生との関わり	13
3-1-1 組織形態への編成 前期：結成～昭和 2 年	13
3-1-2 組織形態の変遷 中期：昭和 2 年～昭和 15 年	14
3-1-3 組織形態の変遷 後期：戦後～現在	14
3-1-4 周囲との乖離と恵迪寮への専属化	15
3-1-5 学生内における応援団の立ち位置の変化	16
3-2 服装・髪型に関する考えの多様化	17
3-2-1 大学予科時代	17
3-2-2 戦後の改革	18

3-2-3 寮歌部の設置と団内のカラー問題	21
3-2-4 服装・髪型が持った新しい価値	23
3-2-5 「ボロ羽織」という概念の誕生	24
3-3 応援活動における比重の変遷	28
3-3-1 明治、大正、昭和（戦前）	28
3-3-2 昭和（戦後）の応援団の再建とその問題	31
3-3-3 恵迪寮への専属化（恵迪寮応援団）	32
3-3-4 現状打破と「応援活動」の活発化	35
3-3-5 活動の幅の拡大と停滞	37
3-3-6 4年制への移行と体育会との関係	38
3-3-7 全学的応援団（応援活動）	39
3-3-8 小樽商科大学定期戦の活動における比重の変遷	43
3-3-9 応援団とその周囲における寮歌への認識の違い	45
3-3-10 全学応援団を目指す中でコンパに付与された価値	48
3-3-11 入団理由と人数の低下	48
3-3-12 周囲との関係性から変化する応援団の理念とその活動	51
4 結論	54

1 研究概要

1-1 研究の背景と目的

日本における応援団は、1800 年代半ばから 1900 年代初めの旧制高校や私立大学のスポーツイベントに際して、選手以外の一般学生や観客の中から発生したといわれている。当初は選手を鼓舞する一面に加え、相手を威圧し、かく乱することを目的とされていた。（丹羽、2020。本節は以下も丹羽、2020 に依っている。）

その後、応援歌の斉唱など技術的応援が生み出され応援による観客の統制がなされるようになり、アメリカのチアリーディングの応援などを参考にして応援に秩序をもたらすようになった。しかし、第 2 次世界大戦による学徒出陣、スポーツ試合の停止などで伝統校の多くの応援団が一度断絶し、現存する応援団の多くは第 2 次世界大戦後に発足している。

戦後の応援団は、高度経済成長とベビーブーム世代の進学による大学数の増加、大衆化などによって戦前の応援団とは全く違った応援の形を編み出すようになった。学ランを基調とし、ブラスバンド、チアリーディングなどを交えた応援スタイルなどがその一例として挙げられる。さらに、応援団に対し、入学式や卒業式での校歌斉唱の指導や演舞の披露、学祭でのステージなど 1 学生組織に学校の公的な場での特別な役割が与えられているとも丹羽（2020）は述べている。

上記のような応援団の中でも、北海道大学応援団は全国的に見て 100 年を超える歴史性に加え、組織面、服装、風貌などの文化面において特殊性が高い部分が多く、さらに歴史の中で組織面、文化面に大きな変化が生まれている。

また、応援団というのは大学組織の中でも活動内容が特殊な組織であり、応援という活動において応援相手、つまり周囲の学生との関係が切っても切り離せないものである。このことから、周囲の応援団以外の学生との関係性が北海道大学応援団に大きな影響を与えていることが推測されるが、その完意についてはこれまで研究がなかった。

そこで、本研究では、北海道大学応援団を事例とし、100 年を超える歴史の中で服装、風貌、活動内容などの変化が起こった要因を、周囲の学生との関係を中心に考察することを目的とする。

1-2 研究対象

丹羽（2018）によれば、応援団が存在する大学は日本全国に全 230 校存在し、その内訳として国立大学 32 校、公立大学 18 校、私立大学 188 校である。なお、この校数は応援団リーダー部あるいはチアリーダー部に相当する部を持っている大学で数えている。

応援団は一般的にエール、手振りなどで応援するリーダー部、楽器を使用する吹奏部、チ

アリーディングを行うチアリーダー部の3つで構成されている。大学によってはこの3つのうちどれかが存在しない大学も存在する。リーダー部の服装としては、学ラン、もしくは羽織を着ることが多く、羽織は団長や幹部などといった役職を持っている人物が着ることが多い。

応援団の成立は、第2次世界大戦後に日本全体で行われた大学の制度改革後であるものがほとんどである。

その中でも、北海道大学応援団は全国的に見て特殊性が高い。まず、歴史という観点で言うと、2024年で113代となり、全国的にも長い歴史を持っている。丹羽（2018）によれば、国立大学で100年を超えている大学応援団は北海道大学応援団と小樽商科大学応援団の2団体だけであり、国立大学応援団の中では北海道大学応援団は最古の存在であるとされている。北海道大学応援団とかかわりが深い旧帝国大学七大学応援団においては、東京大学運動会応援部が1947年（昭和22年）創部、京都大学応援団が1956年（昭和31年）創部、大阪大学応援団が1962年（昭和37年）創部、九州大学応援団が1964年（昭和39年）、東北大学学友会応援団が1966年（昭和41年）創部と七大学応援団の中でもとびぬけて古い存在である。

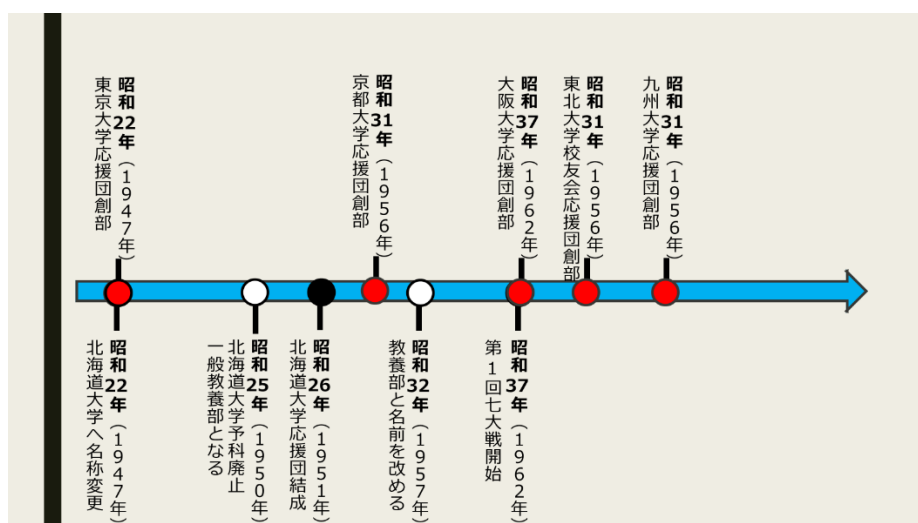


図1 北海道大学・七大学応援団沿革（谷口1978、北海道大学公式HP、東京大学運動会応援部公式HP、東北大学学友会応援団公式HP、京都大学応援団公式HP、大阪大学応援団公式HP、九州大学応援団公式HPより作成。）

組織としてはリーダー部という存在だけで構成されており、チアリーダー部や、吹奏楽部は組織内に存在しておらず、外部団体として存在している。文化面においては、1, 2年生が羽織、3, 4年生からは羽織もしくは学ランを自分で選択する形となっており、その中でも2年生が着る羽織は50年ほど前からの羽織を繕いながら使用しており、通称「ボロ羽織」

と呼ばれている。さらに1, 2年生の間は髪や髭を切らず、代交代をする2年の七大戦まで伸ばし続けるという伝統が存在する。



写真1 ボロ羽織（画面中央）参考写真 2023年11月23日撮影

1-3 研究方法

本研究は、文献調査と聞き取り調査を中心に行った。文献調査として、北海道大学応援団の歴史の昭和50年ごろまでをまとめた『応援団史』（谷口 1978）とその概略に加え平成20年ごろまでをまとめた『青春興亡の百年・応援団概史』（谷口 2006）の二つを中心に調査を行った。また北海道大学応援団の歴史だけでなく、大学応援団、七大学応援団などについても調査を行った。

そのほか応援団のOBに聞き取り調査を依頼し、以下のOBに各1時間ほど聞き取り調査を行った。

表1 聞き取り調査OB詳細表

氏名	代（本研究では幹部の時の代と定義）	在団時期	聞き取り日時	その他備考
T①氏	57代	昭和40年～44年在団	2023/5/21	現延齢会（OB会）会長。 57代団長。
K①氏	69代	昭和52～56年在団	2023/5/25	現延齢会事務局長
T②氏	78代	昭和60年～平成2年在団	2023/6/7	78代団長
K②氏	101代	平成21～25年在団	2023/6/13	101代副団長
T③氏	65代	昭和48～52年在団	2023/6/22	65代団長 「応援団史」著者
H氏	67代	昭和50～54年在団	2024/6/29	67代副団長
N①氏	108代	平成28～31年在団	2024/7/8	108代副団長
N②氏	86代	平成6～10年在団	2024/7/23	86代副団長
M①氏	74代	昭和57～63年在団	2024/7/31	74代副団長
K③氏	44代	昭和27～31年在団	2024/8/4	
M②氏	79代	昭和61～平成4年在	2024/12/7	79代団長

		団		
--	--	---	--	--

文献調査に加え、これらの OB からの聞き取り内容を軸に応援団の変化について考察していく。

2 北海道大学応援団の歴史

2-1 大学予科（旧制高校）

北海道大学応援団は、北海道大学の前身である札幌農学校に存在した教育機関、大学予科内で発足した。その後歴史の中で名称や組織形態が変わり、現在の形になっており、この大学予科が消滅した後でも、その予科の文化は北海道大学応援団に大きな影響を与えている。そのため、この予科の説明から始めていきたい。

大学予科とは、明治時代から昭和時代初期にかけて存在した旧制大学学部への進学のための予備教育を行うため附属機関であり、これに類似した存在として旧制高校が存在する。違いとしては、当該旧制大学の併設学部への進学を前提としているかしていないかが大きな違いであった。第2次世界大戦後の新制大学の移行に伴い消滅し、現在では大学教養部がこれら教育機関に相当している。当時の流行として着古し擦り切れ学生服やマントなどを着用する弊衣破帽、散切り頭に対するアンチテーゼとして髪や髭を伸ばす長髪長髭が存在した。

北海道帝国大学予科は、1876年（明治9年）に札幌農学校が開校してから、終戦後の昭和25年まで存在し、その後は教養部と名前を改めている。その後は1995年（平成7年）に教養部も廃止され、総合教育部という名前で現在は設置されている。2年間を予科生として過ごし、その後は各科に進学するというのが当時の流れであった。文化面においては、北海道大学以外の大学予科（旧制高校）と同じく、弊衣破帽、長髪長髭といういわゆる「バンカラ」スタイルが存在していた。また北海道帝国大学予科生内の校友会として「桜星会」が存在していた。（谷口1978）

予科生のための寄宿舍寮も存在し、1907年（1907年）には東北帝国大学農科大学への昇格を記念し恵迪寮と名付けられた。学生での自治が活発に行われており、終戦後新制大学への移行に伴い、学部生全体のための経済寮としてその在り方を変容させるも現存する学生自治寮として残っている。また、明治40年から続く寮歌作成をほぼ毎年行うなど予科時代から続く文化を色濃く残している。この恵迪寮は昭和30年代ごろの応援団の活動に大きな影響を与えており、考察において重要な役割を果たしていると考えられる。

谷口（1978）によれば、1878年（明治11年）、「学生の体格を強壮にし、活発の気風を発達させる目的」で第1回遊戯会が開催される。これは各科対抗の体育大会であり、札幌市民が見学に来るほど当時盛況であった。1911年（明治44年）には予科生の校友会である桜星会が発足し、1912年には寮歌「都ぞ弥生」が作成される。「都ぞ弥生」は北海道の豊かで美しい自然などを歌っており、「嗚呼玉杯に花うけて」、「紅萌ゆる」と並び、現在日本3大寮歌に数えられている。

その後は新制大学への移行に伴い、予科は廃止され、1950年（昭和50年）に一般教養部、

1957 年（昭和 32 年）に教養部と名前を変更。1995 年（平成 7 年）に現在の形である総合教育部となる。

なお、予科に伴い北海道大学の歴史についても述べる。北海道大学方式 HP によると、北海道大学は 1876 年（明治 9 年）に札幌農学校として開校し、1907（明治 40 年）に東北帝国大学農科大学に昇格した。その後は 1918 年（大正 7 年）に北海道帝国大学に昇格。終戦後の 1947 年（昭和 22 年）に北海道大学へ名称を変えると 2004 年（平成 16 年）に現在の国立大学法人北海道大学となった。

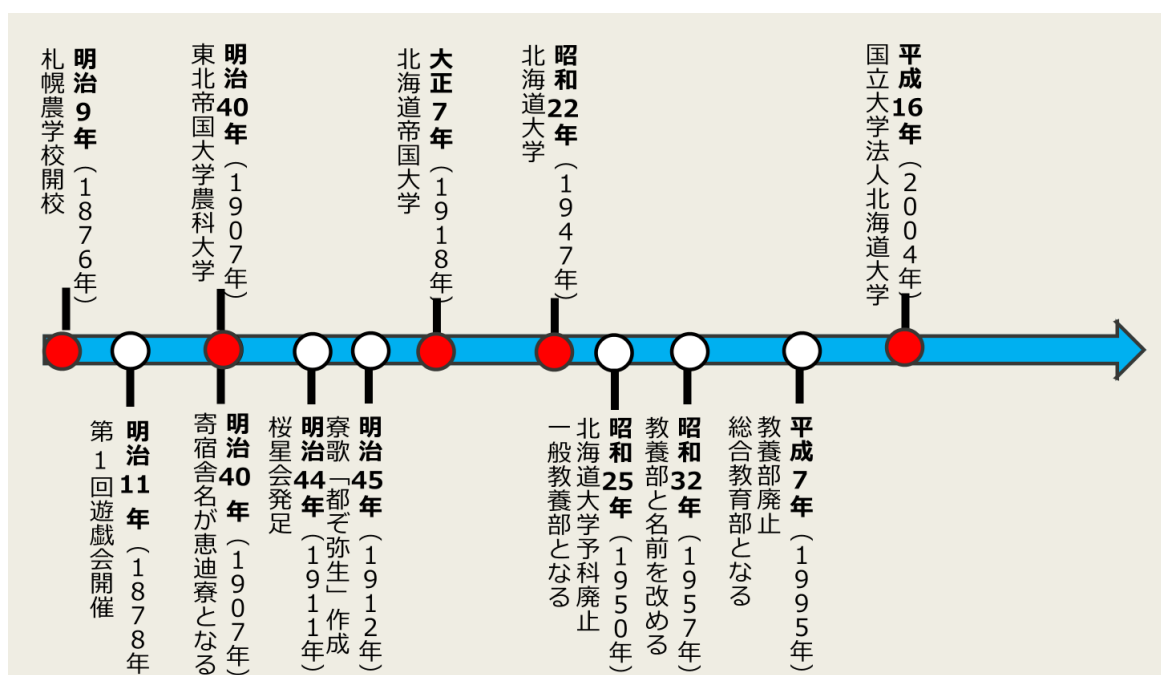


図 2 北海道大学並びに北海道大学予科沿革（谷口 1978 および北海道大学公式 HP より作成）

2-2 北海道大学応援団沿革

北海道大学応援団の原形は、1878 年（明治 11 年）に遊戯会の中で自然発生的に発足した遊戯会予科応援団である。正式な発足の年としては、小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）との定期戦が開始された 1912 年（明治 45 年）とされている。その後は 1922 年（大正 11 年）に遊戯会が中止され、それに伴う形で消滅した遊戯会予科応援団の後を引き継ぎ、同年に北海道帝国大学予科応援団が結成される。その北海道帝国大学予科応援団も 1949 年（昭和 24 年）に戦争の影響で解散、1951（昭和 26 年）に北海道大学応援団として再結成し現在の形となる。（谷口 1978）

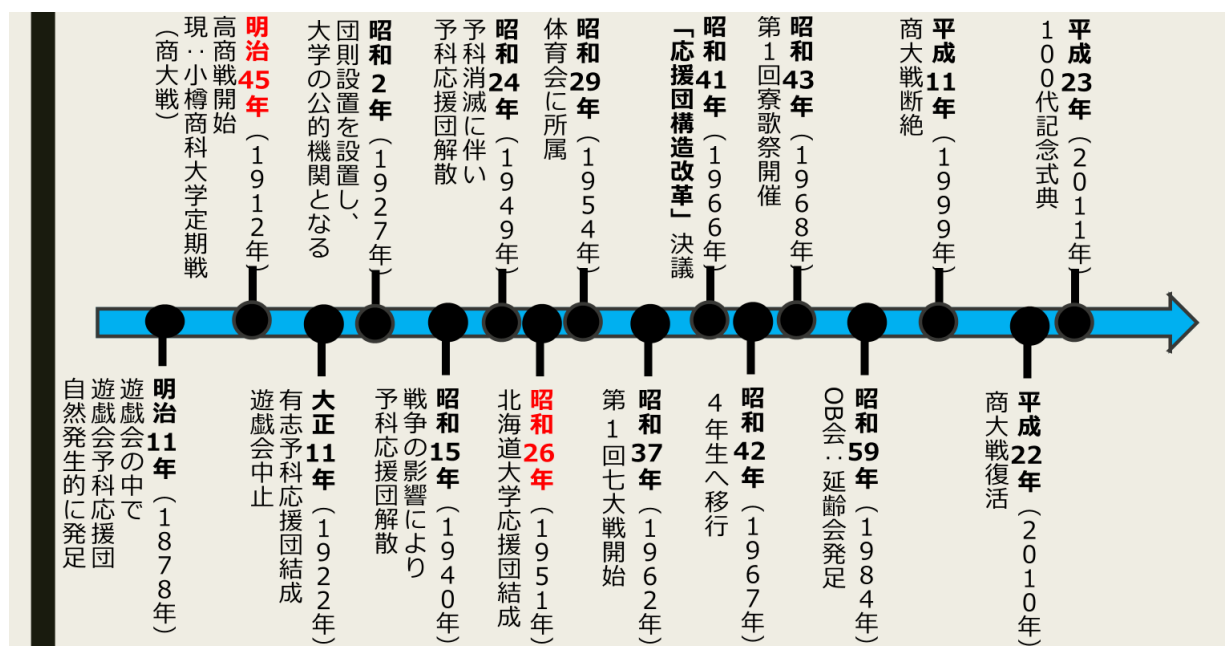


図 3 北海道大学応援団沿革（谷口 1978、2020 より作成）

上記の記述では、北海道大学応援団の主に発足と名称変更について述べたが、今後の記述では、さらにその詳細について時代を細分化して説明していく。

2-3 発足：明治 11 年～昭和 2 年

谷口（1978）によれば、1878 年（明治 11 年）、「学生の体格を強壮にし、活発の気風を発達させる目的」のもと、札幌農学校で第 1 回遊戯会が開催される。これは各科対抗の体育大会であり、各科の学生が集まり、独自の応援歌を作成するなどしていた。その遊戯会内において、予科の学生内で自然発生的に遊戯会予科応援団が誕生した。この遊戯会予科応援団は北海道大学応援団の原形とされており、当時の応援方法としては野次が中心で、「野次隊」や「野次団」などとも呼ばれていた。そして 1912 年（明治 45 年）に小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）との定期戦（通称・高商戦。現在は商大戦と呼ばれている）が開始され、この年を北海道大学応援団の正式な発足の年としている。

1922 年（大正 11 年）には遊戯会が中止されたことに伴い遊戯会予科応援団は消滅するも、同年に北海道帝国大学予科応援団として再結成する。この当時の応援団の特徴として、団長や幹部は有志で構成されており、大正 11 年時点では当時の予科生の 2/3 を占めるほどの巨大組織であった。また、各クラスから太鼓係、リーダー係を選出する、団費をクラスごとに徴収するといった決まりがあった。しかし、団員と非団員の区別ははっきりとしておらず、自身が団員かどうかをわかっていないものも存在していた。

2-4 予科応援団：昭和2年～昭和24年

予科応援団では1927年（昭和2年）に団則が設置され、全予科生を団員とすることが決まり、大学の公認団体となる。団則の概要としては

- ・全予科生を団員とすること
- ・リーダーは各クラスから1名ずつ選出すること
- ・団長は全予科生の選挙によって選出すること

が定められ、応援団が全予科生を団員とし、組織の規模をさらに広げていったことが見受けられる。しかし、応援団の規模が大きくなりすぎてしまい、予科の校友会であった桜星会と対立。のちに桜星会に編入されることとなる。当時の活動においては高商戦応援とインターハイを控える部活動への激励周りが中心であった。

規模を大きくしていった北海道帝国大学予科応援団であったが、1940年（昭和15年）には戦争の影響のため桜星会と共に解散、終戦後の1946年（昭和21年）に復活するも1949年（昭和24年）に新制大学への移行に伴い予科が消滅、予科応援団も解散となる。（谷口1978）

北海道大学予科応援団の特徴として、組織の規模や立ち位置、服装などがあげられる。組織規模はとても大きく、予科生全員を団員としていたこと、それに加え、幹部や団長などを選挙で選出することなどから予科の代表的な側面を持っていたのではないかと考えられる。また、団員を非団員の区別がはっきりとしていないことも特徴的であり、中心部以外の団員の応援団への所属意識は薄く、予科生全体に対して、薄く広く関係するような組織であったのではないかと推測できる。

服装は写真から見えるように非統一的であり、当時の一般的な服装であった学ラン、羽織で応援していた。当時の流行であった弊衣破帽や長髪長髯の「バンカラ」的な装いはしていたが、団内での統一感はなく、決まりとしては存在していなかったのではないかと考えられる。



昭和5年度

大正14年度応援団幹部



写真2（右）大正14年度応援団幹部集合写真（谷口 1978）

写真3（左）昭和5年度応援団幹部集合写真（谷口 1978）

2-5 北海道大学応援団：昭和 26 年～現在

2-5-1 活動の縮小：昭和 26 年～昭和 30 年代前半

谷口（1978）によると、1951 年（昭和 26 年）、消滅した北海道大学予科応援団の跡を継ぐ形で北海道大学応援団が結成された。北海道大学応援団は 1954 年（昭和 29 年）に体育会に所属し、体育会の一部活動という立ち位置になった。体育会とは、部活動生たちが桜星会から独立して結成された組織であり、現在は北海道大学の部活動全体の組織である。

新制大学への移行に伴い、大学の規模の巨大化や、学生内の思想の変化などがおこり、応援団のバンカラ的風潮が受け入れられなくなるとともに応援団と周囲の乖離がすすむ。こうして周囲の学生との距離が離れた応援団は、当時教養部の 3 分の 1 が入居しており、バンカラ気質が色濃く残っていた恵迪寮へ活動の中心が移ることとなる。活動内容としては、これまで行われていたインターハイを控えた部活動へのあいさつ回りなどが縮小し、寮内の伝統行事や商大戦などが活動のメインとなる。当時の団員の考えとして、寮生との関係性や、予科の文化を受け継ぎ、酒を飲んで寮歌を歌うといったバンカラ的な生活を送ることを応援団の存在意義としている団員も存在していた。（谷口 1978）

2-5-2 改革の時代：昭和 30 年後半～昭和 40 年

昭和 30 年代前半までで乖離が進んだ応援団と周囲の学生との関係性を改善すべく、様々な取り組みが行われることとなる。「体育文化全体に関して北大全体に浚渫とした雰囲気を送り込む」ということを目的として、部活動の応援数の増加が始まる。また、1962 年（昭和 37 年）北海道大学応援団が中心となり、旧帝国大学に呼びかけ七大学の体育大会である第 1 回七大戦を開始する。なお、第 1 回七大戦後数年の間に大阪大学応援団、九州大学応援団、東北大学学友会応援団が成立しており、七大戦がこれらの結成の影響に関係している可能性も考えられる。（谷口 1978 並びに各大学応援団公式 HP）

1966 年（昭和 41 年）に「応援団構造改革」が決議される。この決議では大きく以下のことが決定された。

- ・羽織袴、高下駄の応援スタイルから、学ラン、白手袋のスタイルへの変更
- ・ブラスバンド部の設立
- ・2 年であった活動期間を 3 年制に変更

羽織袴スタイルに関しては、応援団 57 代で 1965 年（昭和 40 年）～1969 年（昭和 44 年）の間活動していた T①氏は「応援に注力する中で動きにくい。今の時代にも合っていないとして当時の団長たちが変えた」と述べており、さらに「応援団とは酒を飲んで寮歌を歌うものだと思っていた」、「学ランなんて北大の応援団ではないといって同期が自分以外全員辞めた」とも語っていることから、当時の応援団内でも様々な考えの団員が存在し、これまで

の予科の文化を守り、弊衣破帽、長髪長髭のバンカラ文化の体現者として存在していればよいとする者やこのままではいけないとする考えの者など団内でも対立が起こっていたように考えられる。この考えからか、1, 2 年生が従来通りの羽織袴のスタイルで商大戦を担当し、3 年生が学ランに白手というスタイルに落ち着く。当時 1, 2 年生は寮歌部と呼ばれており、寮歌部、リーダー部、1969 年（昭和 44 年）に分離独立するブラスバンド部の 3 つで応援団は構成されていた。そのほかにも寮歌祭の開催など現在も行われている行事が始まったのがこの時代である。

なお、活動が 2 年生であったのは大学予科が 2 年制であったことの名残であると思われる。今現在の 4 年制への変更は 2 年制や 3 年制への移行を何度か繰り返したのち応援団に定着する。

2-5-3 現在：昭和 50 年代～現在

昭和 40 年代までの改革の動きに加え、昭和 50 年代になると競技応援が増加し始める。昭和 40 年～44 年在団していた T①氏は「応援は頑張っている北大生がいるので行こうというノリで行っていた」「応援にはそんなに重きを置いていなかった」と述べており、それに対して昭和 52 年～56 年の間在団していた K①氏は「応援団を全学的なものにしようという考えが団内で生まれていた」「北大全体を応援する北大の応援団という側面と、予科の伝統を引き継ぐこれまでの歴史的、伝統としての応援団どちらも両取りしようと思っていた」と述べている。活動においても、決勝に部活動が進出した場合のみの応援などが多かったが、春季大会や秋季大会などのリーグ戦にも応援に行くなど、競技応援という活動が応援団の中で大きなウェイトを占めるようになる。（谷口 1978）

また、平成に入ると 1 万人の都ぞ弥生と呼ばれる北大祭最終日における応援団のステージなどが行われるようになる。このように活動の幅を徐々に広げてきた応援団であるが、平成初期に入るにつれ、団員数が低下し、昭和の終わりごろまでは平均 20～30 名ほどいた団員数が 5～10 名弱という状態になる。

3 周囲の学生との関わりに伴う活動・服装等の変遷

3-1 周囲の学生との関わり

3-1-1 組織形態への編成 前期：結成～昭和2年

これまで北海道大学応援団の歴史の概要について述べてきたが、この章ではこれまでの記述および聞き取り調査などから、北海道大学応援団における活動・服装などについて考察する。まず初めに周囲の学生との関わりがどのように変化していったのかについて、大きく前期、中期、後期という時代区分をして考えたい。

北海道大学応援団の始まりは札幌農学校時代の各科対抗の体育大会である遊戯会であり、この遊戯会の中で自然発生的に誕生した遊戯会予科応援団は、有志の集まりであり、団員と非団員との明確な区切りは存在していなかった。団員といっても「応援団費を納入している者」くらいが定義であり、組織としての強い結束などは存在していなかった。（谷口 1978）

当時の応援団について、谷口（1978）の中で大正11年予科応援団員役員、野路光敬氏の回顧録では以下のように述べられている。

「（前略）それなりに当時の応援団の世話役は苦勞も多かったとは思いますが、団としてそれほど権威を振るうこともなく、組織としての統制を強いることはありませんでした。また学生のほうでも敢えて応援団として一定の固定した組織集団としての結束行動などは考えていなかったものです。それならば応援は貧弱なものであったかと申せば、どうしてどうして決して左にあらず。現在のような形式化されたものは全然ありませんでしたが、各自が応援の何たるか、その真髓を語らずして心得ていたものです。その試合試合毎に予科生のうちの熱血漢が自発的に個々に集って来て応援に血道をあげたものです。それはさながら野武士の集団としても申せましょうか。野武士的であっても、夫々に愛好精神とか、愛着のある競技部であるとか、選手と親密であるとか、試合にはぜひとも勝って美酒に酔わんとか、それらを含めて目的意識はありましたので、そこはうまくしたもので、単なる烏合の衆とはならず自主的に一致団結して熾んな応援を繰り広げたものです。」（谷口 1978:13）

この回顧録から、応援団としての集団意識は低く、応援というひとつの行為に対して個々人が自発的に集まっていたように考えられる。

遊戯会予科応援団が解散し、北海道帝国大学予科応援団が結成されると少しずつ組織的發展をしていくようになる。谷口（1978）によれば、団員数は年々増加し、大正13年度には全予科生904名中707名が応援団員であった。さらに大正14年度の幹部役員、並びにリーダー合計64名存在し、これらから、応援団の規模が徐々に大きくなり、組織として巨大

になると同時に組織構造としても発展を遂げていったのではないかと推測できる。

3-1-2 組織形態の変遷 中期：昭和2年～昭和15年

組織的發展を遂げ、予科内の巨大組織になった応援団であったが、さらに規模を拡大し、全予科を基盤としたものにするべく、団則を設置した。団則では全予科生が応援団員とすること、幹部を各類から選出することに加え、応援団長を全予科生の選挙により選出することなどを定め、応援団は全予科生を基盤とする自治的機関となった。これらにより、応援団は予科内の全学的な組織としての位置を確立する（谷口 1978）。

さらに谷口（1978）は次のように述べている。「応援団活動の中枢たる応援団幹部の権威は非常に高いものであったのだ。応援団幹部は単なる競技応援活動のリーダーではなくして、予科スピリットの権化であり余暇生活の旗手であると自他ともに認める存在であった。したがって、全予科生に推敲される団長をはじめ各類から選出される幹部は、容姿、人格共に優れた人物、行ってみれば「ミスター予科」的人物であった。特に当時は全予科生の選挙によって遂行されるのは応援団長のみであり、応援団長は全予科生を唯一代表する存在として信頼と権威を得ていたのであった。」このように予科内で予科の代表としての面を持っていたが、1940（昭和15年）に戦争の影響で一時解散となる（谷口 1978）。

前期との大きな違いは全予科生が応援団員であることである。前期は曖昧であった団員と非団員の区切りが消滅し、予科生＝応援団という状態になる。また、団長、幹部を選挙で選出することで、応援団に予科の代表的な人物が集まり、それがそのまま応援団という組織の権威を増すことにつながったのではないかと考えられる。

さらにもう一点注目したいのが応援する側とされる側ということである。前期、中期にかけて規模が増大し、全予科生が応援団になったことで、応援される側と応援する側は競技時のみその区別が生まれるが、それ以外は同じ応援団員なのである。そのため、現在の形とは大きく異なっており、幹部、団長以外の団員の応援団に対する意識も現在とは大きく違っていたのではないだろうか。この部分については後の 3-1-5 学生内における応援団の立ち位置の変化で述べる。

3-1-3 組織形態の変遷 後期：戦後～現在

昭和10年代に入ると第2次世界大戦など世界情勢の不安から、学生の様々な活動が制限されるようになった。1940年（昭和15年）には応援団も廃止、1942年（昭和17年）には応援団のメイン活動のひとつであった高商戦（現・商大戦）も停止されることとなるが、予科応援団は終戦後の1946年（昭和21年）に戦前と同じく予科生内の選挙で団長が決定される形で復活することとなる。しかし、復活して3年後の1949年（昭和24年）、制度改革

によって北海道帝国大学は北海道大学へと変更され、予科も消滅し、教養部となる。これに伴い、北海道帝国大学予科応援団も解散する。当時の幹部の中には「新しい時代の新しい応援団が出現することを期する発展的解消として予科応援団をとらえていこう」という考えの者もいたとされている。

こうして予科応援団は解散したが、1951年（昭和26年）に高商戦が対小樽商科大学定期戦（通称・商大戦）として復活。それに伴い応援団が結成され、北海道大学応援団として新たに発足する。しかし、この北海道大学応援団は結成当時の1年間は選挙制であったものの、翌年からは有志幹部・リーダー制となる。その後は1954年（昭和29年）に体育会の公認団体となったものの、実際としては体育会との関係性はほとんどなく、昭和30年代後半に至るまでは体育会と応援団とのかわりはない。

体育会とは、北海道帝国大学予科生の校友会であった桜星会から分離・独立した組織である。桜星会はもともと全予科生が所属していたが、戦後桜星会の学生自治色が強くなるにつれ、桜星会と各運動部のつながりが弱いものになっていく。そうして北海道帝国大学が北海道大学へと変更された1949年（昭和24年）に、予科運動部は桜星会から離れ、北大体育会に所属し新制運動部として出発した（谷口 1978）。この体育会は、現在は4年生までの全学部生を対象としており、規模はとて大きなものになっている。

こうして誕生した体育会に応援団も所属し、数百人いた団員も数十人と規模を縮小していく。これにより、全予科生、教養部の学生全体に影響を与えていた応援団は全学部生内における体育会の1組織となり、全学的な応援団としての側面が、規模的な面、並びに組織の立ち位置的な面の2点から薄れていくきっかけになったのではないかと考えられる。

3-1-4 周囲との乖離と恵迪寮への専属化

団員と非団員の区別があいまいであった遊戯会予科応援団から始まり、全予科生を団員としていた予科応援団の時代には、応援団＝予科生という形であったが、体育会の所属、有志幹部、リーダー制に加え、団員数の低下などにより応援団員と非応援団員という区切りが明確になる。なお、このころより以後、有志幹部・リーダーをさして「応援団員」と呼ぶようになる。

応援団は予科の代表としての側面も持っており、中心人物たちは予科のバンカラ文化を受け継いでいる人物が多く、予科が消滅したのちも応援団の文化として、予科の文化を受け継ぐ存在としてこの文化は残っていた。しかし、新制大学への移行にともない、学生内の思想、流行などが変化してきた。この影響からか応援団の服装、行動などを好ましく思わないものが多く、昭和30年代前半にかけてには応援団と周囲の学生との乖離が進んでいく。

この現状に対し応援団は当時色濃く予科の文化を残していた恵迪寮へ専属化し始める。もともと恵迪寮は予科時代、全予科生の3分の1ほどが生活しており、予科の文化に対しても活発な人間が多く住んでおり、幹部や応援リーダーに選ばれるものも多かった。応援団

と周囲の学生との乖離が進む昭和 30 年代にかけても恵迪寮は予科時代のバンカラ文化を色濃く残しており、応援団と恵迪寮が予科の文化を体現する数少ない存在であったと考えられる。実際に、新制大学になった後に結成された北海道大学応援団の応援リーダーの約 7, 8 割が恵迪寮生であった。

さらに恵迪寮は昭和初期から寮生の多くが部活動に所属しており、谷口（1978）によれば昭和 8 年 3 月の時点で全寮生 187 名中 145 名が運動部員であった。寮内における運動部員同士での結束は高く、寮内の数部屋を「応援団部屋」、「空手部部屋」といったように各部活動ごとに所有していた。これも応援団が恵迪寮に専属化する一つの要因になったと考えられる。

しかし、もともと応援団と恵迪寮は別の存在であり、応援団の組織と概要はあくまで恵迪寮の外部に存在する物であった。そのため、寮内における応援団が主催する行事等はなかったが、応援団の恵迪寮への専属化が進むにつれ、応援団と恵迪寮がほぼ同化し始め、応援団の生活基盤が恵迪寮のみになるようになった。（谷口 1978）

3-1-5 学生内における応援団の立ち位置の変化

これまで、時代区分を大きく 3 つに分けて応援団と周囲の学生との関係性を見てきた。その中で応援団の学生内における立ち位置は大きく変わっており、その大きな転換点は、昭和 20 年の終戦と予科の廃止にあるとっていいだろう。

結成直後の応援団は組織としての境目が曖昧であり、応援団員と非団員の区別もはっきりとはしていなかった。その状態から少しずつ規模が拡大し、昭和 2 年には団則の設置により全予科生を団員とし、団長や幹部を予科生内の選挙で選出することとなった。これらのことから応援団という組織が、予科内での組織規模の拡大、一定の権威の確立などの組織的発展を遂げたと言える。予科全体にわたる権威を応援団が持っており、全学的応援団としての立ち位置を手に入れたといえる。

しかしその後、終戦により一度解体され、再結成した予科応援団ではあるが、予科の廃止により、これまでの中心であった団長、幹部たちのみで構成された体育会内の一組織という立ち位置になってしまう。これにより大きく二つの変化が起こったのではないかと考える。

一つはこれまでほぼ同化していた応援団と周囲の学生（≒予科生）が応援する側とされる側という立ち位置に分化したということである。これまで応援団と周囲の学生はほぼ同義であり、異なる部活動の部員が自分と違う部活動の応援に行くなどが起こっていた。しかし、応援団の体育会への所属、予科という枠組みの消失などにより応援団と周囲の学生が明確に分かれることになる。これにより、周囲の学生は応援団に対し、応援団を完全に外部の存在であると考えられるようになる。

また、これまで全予科生が団員の巨大な組織であった応援団が、団長、幹部などを中心とした少数の団体になってしまったことで、「予科の中心」であった応援団が「学生団体の 1

組織」という属性を持つようになったと考えられる。

昭和 27～31 年に在団していた OB である 44 代の K③氏も、「応援団が動くというよりも、学生が動いてその中に応援団がいた。商大戦のパレードなどに関しても、応援団で呼びかけはしておらず、歩いているうちに周囲から話を聞きつけた学生たちがついてきていた」と述べている。応援団と周囲の学生との関係性は予科廃止後すぐには変わったのではなく、応援団再結成直後はそれほど変わっておらず、時間をかけて徐々に変容していったのではないかと考える。

3-2 服装・髪型に関する考えの多様化

3-2-1 大学予科時代

現在の北海道大学応援団は、2 年制の夏の七大戦までに髪や髭を伸ばす、また 50 年以上前から繕われながら存在する羽織（通称、ボロ羽織）を着るという伝統があり、これらは大学予科時代の文化を踏襲したものとされている。髪や髭を伸ばす長髪長髭、ボロボロの服を着る弊衣破帽などは、バンカラ文化と呼ばれる当時の旧制高校や大学予科で流行っていた文化のことである。2 年生の夏の七大戦以後は、学ランか羽織のどちらかを選択して着用している。

予科が消滅する昭和 20 年代までは弊衣破帽、長髪長髭のバンカラ文化は予科の文化として存在していたため、応援団内にもそのような格好をしている者が多かった。また、団長や幹部は選挙で選ばれ、予科の代表的な人物があつまるという側面もあったため、このバンカラ文化に積極的なものが多かった。応援団が予科の代表、バンカラ文化の象徴であると認識されていたものと考えられる。



昭和5年度応援団幹部

昭和
5
年
度

大正14年度応援団幹部



写真 2（右）大正 14 年度応援団幹部集合写真（谷口 1978）

写真 3（左）昭和 5 年度応援団幹部集合写真（谷口 1978）

しかし、これら二つの写真を見ると、弊衣破帽や、長髪長髭を全員がしているわけではなく、服装も現在のように学ランもしくは羽織で統一されてはいない。予科が廃止された直後に活動していた K③氏は、服装などについて「ボロボロの服を着るなどは結構みんなやっていた。髪や髭に関しては、髪だけ伸ばすものもいたし、みんな趣味で伸ばしていた。服装はシャツや学生服が多かった」、「団長は綱を付けるくらいで今のように特徴的な服装をすることはなかった」などと述べており、応援団の服装などについては明確な決まりはなく、髪型などはあくまでその当時の流行として存在していただけであると考えられる。

3-2-2 戦後の改革

終戦後、1951 年（昭和 26 年）に応援団が復活すると、その応援のスタイルが応援団内で問題となった。谷口（1978）によれば、当時は大学全体が新制大学のあるべき姿を模索していた時期であり、北大の一貫性を説く伝統論、新制と旧制の気質の違いを説く遺物論等が団内で激しく議論された。1949 年（昭和 24 年）の予科応援団解散時には、幹部内で新しい時代の新しい応援団が出現することを期する発展的解消として予科応援団をとらえていこうというような考え方があったこともこの議論を巻き起こした大きな理由の一つである。しかし、結論の出ないまま予算や準備期間などの関係によって今後も応援団の活動スタイルは検討を続けていくことになった。新制大学の応援団として新しいスタイルの応援団を求めるのではなく、これまでの予科時代の応援団の応援スタイルを引き継いでいこうとしたのである。

こうして活動を始めた北海道大学応援団であったが、新制大学へ移行し学生の気質が大きく変化したことで、学生たちと、予科時代の応援団の応援スタイルを引き継いでいる応援団との間で、乖離が生じはじめる。この状態の打破のため、応援団内で 1965 年（昭和 40 年）に「応援団構造改革」が決議される。この決議で応援スタイルを、長髪長髭で羽織を着た北大予科の応援スタイルから、新しいスマートなものにしようと決定され、学ランに白手という現代の応援団に多いスタイルになった。写真は昭和 42 年の活動写真であり、ブラスバンド部と共に、全員が学ランで応援している姿が写っている。



第1回 北大寮歌祭 (於 クラーク会館)
昭和42年11月20日

寮 歌 祭

写真4 第1回寮歌祭 (谷口 1978)

しかし、その改革には当然反対も多く、団誌「蠻聲」にある「学生服と着物」という欄によれば、着物派と学生服派で団内でも大きく対立が起こっていたようである。以下に一部を抜粋する。

「9月15日 夕方1年目だけで話し合った。応援団の今後の方向について、学生服にするかどうかを中心に。1時間余り論戦をやったが結局は1本化した結論は出なかった。それで18日の段階では、個人個人の意見を述べることにした。筆者個人の受け取り方として、この話し合いの結論を書こう。

学生服派の意見

- 1、量だけの応援団に没する危険性がある。(着物の場合)
- 2、大々的な活動ができない。(着物であれば)

着物派の意見

- 1、学生服でなければ、前述のような行動ができないということは決してない。要はその実行力にかかる。
- 2、五十数代存続してきたこの形を破るのは先輩たちにも申し訳ない。」¹

「(前略) 応援をサボって怒られたものは何人かいた。俺の属した高校の応援団もやはり怠慢であったが、こんなに甘くはなかった。

ではそうさせるのは何か。応援団員が自らの装いに溺れ、こうしておりさえすれば、俺は応援団員なのだとする誤った考えを起すからなのである。」²

「応援団を外から見た場合、応援団は北大の昔からのバンカラの気風を代表し、これを継承、保存している唯一のサークルだという人もいれば、いつも酒ばかり飲み、寮歌をどなり、ストームして電車を止め、所かまわず暴れまわる恵迪寮にくすぶってい

¹ 第54代応援団発行 団誌「蠻聲」(p.42) より

² 第54代応援団発行 団誌「蠻聲」(p.42) より

る無頼漢の集まりだとみる人もいる。一種の憧憬に似たものをもって、あの姿行動を好意的に見る人もあれば、北大の恥部だと顔をしかめる人もいる。共通して言えることは、応援活動を見ての批評ではなく、姿・私生活の行動からの批評だということだ。応援団が応援するということ自体にも面白がっている人もいれば、はなはだしいのになると北大応援団の存在を知らない人もいる始末。（この人達は応援団を恵迪寮の1サークルと思っているのだが。）このような批評が出てくるのは、あの姿が目立ちすぎるからであろう。いくら応援活動を真剣に行っている、あの姿を見た時、ただ暴れているとしか見えないのかもしれない。我々としては、このようなイメージを早く変えてほしい。活動を見て評価してもらいたいものだ。

しかし、もっと悪いことには、応援団員の中にもそのようなムードがあるという事実である。私もそうであったが、入団する際応援団員のほとんどの者は、応援活動に惹かれて入ってくるのではなく、バンカラな姿、気風に憧れて入団するのである。

（中略）団員に応援を行う応援団たることを自覚させ、一般学生に応援を行う応援団であることをさとってもらうためにも、学生服という有効な手段を講じたのである。」

3

さらに、この改革の時期に在団していた57代団長であるT①氏への聞き取りでは、「応援の際に動きづらいからと言って先輩が変えた」、「自分は動きづらいと思っていなかった」、「学生服の応援団なんて北大の応援団ではないといって同期が皆辞めた」などと語られている。これらから、学生服派と着物派の二つの意見は、応援団というものに対しての考えの違いが存在していたのではないかと考える。

羽織袴で長髪長髭のスタイルは、応援団とは、大学予科の伝統を引き継ぐものであるという考えが根底にあり、そのために今の形を継続していこうという考えであるように見受けられる。その一方で、学生服派の意見としては、応援団とは、部活動への応援を行うものであるという意識が根底にあり、応援のために動きやすい服装にしようといった考えがあったものと思われる。

さらに、応援団に対するイメージを変革させたいというのも変革が起こった理由の一つであると考えられる。詳細は後述するが、昭和30年代後半にかけて、七大戦の開催など応援団の活動において部活動などの応援といった競技応援が少しずつ増加していく。恵迪寮に専属化してしまった応援団を変革すべく、応援活動によって応援団のイメージを変革させようとしたのである。しかし、引用にある通り、そのイメージ変革の足かせとなったのが予科時代の伝統を引き継ぐ長髪長髭、弊衣破帽の装いである。応援団内部・外部共にこれまでの予科応援団のイメージが存在しており、その予科応援団のイメージが先行してしまうことが、応援団のイメージ変革を阻害していたのである。

また、応援活動が増え、外部の応援団と関わるようになったことも原因として考えられる。

³ 第55代応援団発行 団誌「蠻聲」より。谷口（1978:67）に収録されたものから引用

これまで外部の応援団と関わる機会是小樽商科大学以外ほとんどなかった。しかし、1962 年（昭和 37 年）の七大戦開催、東京へのボート全国応援など、応援活動での遠征、外部の応援団と関わる機会が増え、北大応援団以外の応援団のスタイル（学ラン、白手）のスタイルに触れる機会が増えたこともこの変革を起こした要因のひとつであろう。

これらのことから、昭和 40 年初頭に応援団構造改革がなされ、服装に関して大きな変化を起こした原因は、応援団員の応援団というものに対する意識に、予科の伝統を引き継ぐものという意識に加え、応援をする団体であるという意識が芽生えてきたことにあると考えられる。応援をするための動きやすさという面と、応援される側、つまり競技者である他の部活動を含む外部の学生からの印象を良くしようという考えが応援団のなかで強くなってきたこと、さらに応援団内部での自団体に対する意識を改善したいという思いからこのような改革が行われたと考えられる。

もう一つ、服装についての認識にも大きな転換があったことにも注目したい。それは羽織袴、長髪長髭のスタイルを予科時代の伝統、文化として北大応援団並びに周囲が捉えていることである。これまで服装、並びに容姿に関して写真から推測される限り、応援団の服装などに特定の決まりは存在せず、あくまで当時の流行、一般的な服装であった。しかし、予科応援団が消滅し、新制大学、北海道大学応援団として再出発する際にスタイル問題が生じたように、それまで一般的な服装、当時の流行であったものが、一般的ではなくなり、応援団の文化、伝統として捉えられるようになったのである。

これは、予科が消滅したこと、学生内の流行が変わったことなどが要因として考えられる。また、予科内の中心的な人物たちが予科応援団では団長、幹部として活動していたため、予科のバンカラ文化の象徴のような人物たちが多かったと推測できる。そのため、予科生全員ではなくなり、数十人程度の体育会の 1 組織となった北大応援団にあっても従来のバンカラというイメージが応援団内外で強くついていたと考えられる。

3-2-3 寮歌部の設置と団内のカラー問題

昭和 40 年初頭の応援団構造改革により、反対もありながら学生服、白手のスタイルへとスタイルを変更した北大応援団であったが、1970 年（昭和 45 年）にはこれまでの羽織袴のスタイルへと転換する。

この理由としては大きく「寮歌部」と「ブラスバンド部」の二つが関係していると考えられる。寮歌部とは、構造改革の結果、リーダー部、ブラスバンド部と並んで設立されたものであり、その活動内容は対小樽商科大学定期戦（商大戦）の対面式を行うことであった。（谷口 1978）対面式の詳細に関しては「活動内容における比重の変遷」において後述するが、商大戦における情宣活動として行われてきたものであり、小樽商科大学応援団と北海道大学応援団が両校そろい踏み、檄文と呼ばれるものを読み上げながら、相手校をののしったり、学生を鼓舞したりするものである。この商大戦に際して、相手校であり、これまでの予科応

援団と同じ羽織袴スタイルで臨む小樽商科大学応援団に合わせるため、旧来の羽織袴スタイルを北海道大学応援団は残さなければならなかった。

このために設置されたのが寮歌部である。この寮歌部に関して、応援団構造改革の年の次年度の団長である第 56 代団長、土井興一郎氏は、団誌「蠻聲」第 54 号の中の「改革の問題点-寮歌部の設置と対面式」において次のように語っている。

「寮歌部とは、従来の応援団の姿を、北大応援団の一部として、総務部、リーダー部、ブラスバンド部と並んで同等の位置に残したものである。寮歌部員は長髪である。従って 1 年、2 年目の団員が主体となる。

しかし寮歌部員はリーダー部と同じように練習し、応援活動の間ではもちろん学生服でやってもらう。寮歌部は何をするのかと云えば、対小樽商科大学定期戦の対面式を行うのである。

応援団の定期戦における情宣活動のひとつとして定期戦を行ってもらう。

だが寮歌部の設置は今後の変革理由に明らかに矛盾するし、変革が何か中途半端な印象を与える事になる。

ここで定期戦のことを改めて考える必要がある。長年続けられてきた定期戦も、去年で第五一回が小樽で開かれた。定期戦を通して、小樽商科大学と北大は兄弟校の間柄となっているし、両校の応援団同士も他には見られぬほど親密な関係を結んでいる。我々が寮歌部という形で、バンカラな姿を残したのも、活動としてよりもこの精神的なものに対してであった。」⁴

この記述にあるように、長年行われてきた商大戦というものを通じて小樽商科大学と北海道大学の間には強い関係性ができていた。そしてその伝統、関係性を重視したために、応援団構造改革とは一部矛盾する形となっても、従来の長髪長髭、羽織袴のスタイルを寮歌部として残したのである。

さらに、ひとつ前の章でも述べた北大応援団に対してのイメージというのもこの寮歌部が設置された要因の一つである。団誌「蠻聲」から、北大応援団のスタイルについていくつか引用する。

「今迄の応援団が型破りの姿であっただけに技術的、組織的な面においてはともかくとして、その異様な姿が北大独特の強烈なカラーを持っていた。

あの姿が北大の伝統を象徴するものとして、応援団員のみならず、一般学生、運動部の間においても愛着を感じさせていたと思う。

⁴ 第 56 代応援団発行 団誌「蠻聲」第 54 号「改革の問題点-寮歌部の設置と対面式」より。 谷口（1978:75）に収録されたものから引用

遠征先で、規格品的な他校の応援団の中にある姿を見た時、応援される運動部にとって一種の誇らしさ、親しみ、懐かしさを感じることもあっただろう。
今度の変革では、どうしても規格品的な応援団になりがちであり、いくら工夫しても、あの強烈な色彩は薄れることになるだろう。」⁵

「現在吾が応援団は「着物応援団」から「学生服応援団」に変わってから4代目。いわゆる過渡期の悩みを抱えて右に左にジグザグし、試行錯誤しながら進んでいる。ところが、巷間の雑誌には、「北大応援団＝全盛期の遺物」「改革前の姿」として紹介されている。従って新入団員の多くはそのイメージで入ってくる。入ってびっくり玉手箱。上級生は学生服でやってござる。「そら殺生や！契約違反や！」と叫んでみても、それは団の責任ではない。」⁶

このように競技応援の際の視覚的なインパクトという実利的な面、旧来の応援団に対するイメージなどが、学生服スタイルへの改革の大きな障害となっていたのである。

この問題はブラスバンド部の分離によって解決される。1969年（昭和44年）にブラスバンド部から吹奏楽自体、それを内含するところの音楽全般にわたる研究ということを第一の目標にしたいという理由により、応援団からの分離が提案された。リーダー部内での意見は二つに割れたが、分離が決定、これにより、ブラスバンド部の演奏を前提としていた学生服での応援スタイルの価値は喪失したのである。

その後は、1、2年生が羽織袴スタイルの応援を行い、3、4年生は学生服スタイルで応援をするが、あくまで基本形態である羽織袴スタイルの応援の補完的役割を果たすに過ぎないという形になった。（谷口 1978）

このスタイルはその後も引き継がれ、今現在は、1、2年生は長髪長髭かつ羽織袴のスタイルで、3、4年生は学ランか羽織のどちらかを選択し応援に臨むこととなっている。

3-2-4 服装・髪型を持った新しい価値

これまで服装・髪型等の変遷、またそれに対しての応援団の考えの変遷を見てきたが、予科消滅後、服装・髪型等についての考えが多様化し、様々な価値が生まれることとなったと考える。

予科時代の応援団の服装・髪型は一般的であり、そこに特段の意図などはなかった。予科

⁵ 団誌「蠻聲」第54号「応援歌カラーの問題」より。谷口（1978:77）に収録されたものから引用

⁶ 団誌「蠻聲」第56号「応援団をどう進めるか」より。谷口（1978:78）に収録されたものから引用

内の文化として存在しており、服装などに関しても言えば応援団としての文化というよりも予科のバンカラ文化を引っ張る存在として応援団が存在していたといえる。

しかし、終戦後予科が消滅し、予科の文化が消滅したことで、応援団の容貌は周囲の学生たちの中でも特異的なものとなった。また旧来のスタイルを引き継いで活動していこうという考えのもと、これまでの服装が伝統・文化として扱われるようになる。65 代応援団であり、「応援団史」執筆者の T③氏は終戦後の服装の変遷に関して、聞き取り時には「予科の伝統・文化を引き継ぐ存在として「概念化」したのではないか」とも述べており、終戦後の応援団の服装・髪型は、応援団の応援団たるアイデンティティとしての意味が加えられたといえる。

そして昭和 30 年代後半から応援活動が活発化してくる。これが服装・髪型に対して新しい価値を生み出すこととなる。すなわち応援時に役に立つということである。86 代の N①氏、101 代の K②氏などは「ボロ羽織は応援時に目立つ」、「応援で注目される」などとも述べており応援の際に他の応援団にない風貌での応援は、観客席でとても目立ち、応援の際に周囲の観客の視線を集め、応援しやすくするという利点が存在すると思われる。

3-2-5 「ボロ羽織」という概念の誕生

服装・髪型について、最後にもう一つ「ボロ羽織」という単語に注目したい。1, 2 年生が髪や髭を伸ばし、ボロボロの羽織を着るという応援団の文化の中で、2 年制が着る羽織のみが「ボロ羽織」と呼ばれている。1 年生は「兵隊」と呼ばれ、1 年生が着る羽織に関しては特段の呼び名ではなく、また内着のみで羽織を着ることはない。1 年生の夏の七大戦が終わり、代が交代すると、1 年間自分が着る羽織を選び、その次の年の夏まで「ボロ羽織」として活動するのである。

「ボロ羽織」とは写真 1 にあるような羽織であり、団内でも数着しか存在しない。またそれぞれに名前が付けられており、羽織に縫い付けられている布の色などから「赤ボロ」、「青ボロ」、「緑ボロ」などが存在する。



写真 1 ボロ羽織（画面中央）参考写真 2023 年 11 月 23 日撮影

このボロ羽織に関して特筆すべきは、平成になってから生まれた呼び名であるというこ

とである。これまでの聞き取りの中で、平成以前の OB に話を聞くと、全員が「自分たちのときにはボロ羽織とは呼んでいなかった」と述べている。

昭和 60 年～平成 2 年の間在団しており、昭和と平成をまたいで活動していた、78 代団長の T②氏は「自分が 1, 2 年生の時はボロと呼ぶと怒られた。羽織はきちんと布を当てて修繕しなければならなかった。」「今のような服装とは全く違った。今ほどボロボロじゃなかった」「社会人になり、落ち着いて OB として応援団にかかわろうとしたときにはすでにボロと呼ばれていた。」などと述べている。昭和 61 年～平成 8 年まで在学しており、79 代の団長であった M②氏によれば「いつからかは覚えていないが、自分の在学中にそう呼ばれるようになった。」と述べており、平成初期にボロ羽織という言葉が使われるようになったと考えられる。団誌「蠻聲」の中で最初にボロ羽織という言葉が出てきたのは 80 代の「団員他己紹介」の欄である。

「準幹部にして現役ボロ羽織団員以上の汚さゆえに周りには義兄弟 W 杯以外はハエすら寄せ付けない。こんな彼に祝福のあらんことを。」⁷

それ以後、蠻聲の中でボロ羽織という言葉が使われるようになる。これは劣化した羽織が「ボロ羽織」と呼ばれるようになり、そのまま応援団の文化として定着したと考えられる。ここに関して、なぜそのようになるまで長く使われ続けたのかという点と、なぜ応援団は「ボロ羽織」という言葉を使うようになったのかという点の二つに分けて考えたい。

まず、羽織がボロ羽織と呼ばれるほど長く使われ続けたのにはいくつかの理由が考えられる。一つが羽織の希少さである。現存している羽織は市民もしくは OB の方からご寄付いただくものもあるが、ほとんどは昔から使われてきたものを修繕して、引き継いで使っている。65 代団長の T③氏は「自分の時に北海道新聞に公告をうって、羽織の寄付を依頼した。かなり多くの羽織が集まった。」と述べており、これが昭和 50 年代前半の出来事である。今現在使用されているボロ羽織は、おおよそ 5,60 年以上前から引き継がれてきたといわれているため、ボロではない羽織はこの昭和 50 年代の時期以降の羽織で、ボロ羽織はそれ以前の羽織であると推測できる。

昭和 52 年～昭和 56 年に在団していた K②氏は「先輩の羽織を引き継ぐか、新しい羽織にするかどちらかを選べた。ほつれたら修繕し、大事に使っていた。」と述べており、いただいたものという意識と、先人の羽織を大事にするという意識があったように見受けられる。さらに羽織が市民の一般的な服装ではなくなり、その希少性が上がったことも加え、修繕をしながら使い続けられたのである。

もう一つの理由が弊衣破帽という考えである。この考えは予科時代から続く考えであり、見た目などにとらわれず、真理を追求するためあえてボロボロですり切れた服や学帽などを着用するといったものである。この考えが今のボロ羽織にも適応されているのではない

⁷ 第 80 代発行 団誌「蠻聲」 「団員他己紹介 小野善浩」(23p) より

かと考える。昭和 60 年～平成 2 年在団の T②氏（78 代団長）は服装に対して、「ボロは着てても心は錦、そんな感じの考えでやっていた気がする」と述べており、これらの考えから、羽織は修繕されながら引き継がれ続けてきたと思われる。

そうして引き継がれ続けてきた羽織ではあるが、少しずつ原形の布がなくなっていく。その結果「ボロ」と呼ばれるほどにまでなったのが、ちょうど平成に入っている頃ではないかと推測される。

平成以前の羽織の写真を見ると、以下のようになっており、応援団構造改革前の昭和の中期までは羽織に特段の特徴はないように思える。



写真 5 (左) 昭和 29 年度対面式活動写真 (谷口 1978)



写真 6 (右) 昭和 35 年度対面式活動写真 (谷口 1978)

応援団構造改革が行われた 40 年代以降から、羽織に縫い付けられている布が少しずつ目立つようになる。



写真 7 昭和 49 年撮影 第 59 回対面式 (谷口 1978)



写真 8 昭和 51 年撮影 第 61 回対面式 (谷口 1978)

79 代団長の M②氏は聞き取りの際に「自分の時は 10～20 前後くらい布が縫い付けられていた。先輩の名前が入った布が縫い付けられていた。」と述べており、写真を見ると、今現在の羽織ほどではないが、かなりもともとの布と縫い付けられた布の面積が入れ替わっており、今の現状に近い形となっている。



写真 9 79 代活動写真 (79 代応援団発行 「蠻聲」 p.5)

写真 10 90 代応援団 (2001 年「北溟」 クラブ紹介 北大応援団 p.99)

これらの写真から、羽織に布を当てている状態から、当てていた布の集合体が羽織としての形を成すように徐々に変遷をしてきたのである。平成 6 年～10 年で在団していた N①氏も聞き取りにおいて「自分の時にはもう今と同じような感じの服装だった。」などと述べており、今現在の形状になったのはおおよそ平成に入ってからのことであると思われる。

次に「ボロ羽織」という言葉が定着した理由を考察していく。ボロ羽織に対して「応援団史」作成者であり、札幌市民として昔から応援団の姿を見てきた T③氏は、聞き取りの際に以下のように語っている。

「服装がある時期から突然デフォルメされていったように感じる。(中略) 自分の母などは昔から応援団に対し好意を持っていたが、あのボロボロの羽織を見て「応援団があんなだらしのない格好をするな。」などと怒っていた。(中略) いってみれば、あれは歌舞伎のように、前からあったものが時代の流れの中でよりわかりやすく、より

インパクトがあるように強調されていた結果あなっただのではないか。」⁸

この言葉にもあるように、昭和終盤～平成の初めあたりから突然のデフォルメが「ボロ羽織」という言葉と共に始まったように見える。「ボロ羽織」と名付けることによって、あえてボロを着ているということを主張し、ただの汚い羽織ではなく、予科から続く伝統を引き継いだ存在であるということを強調する狙いがあったと思われる。そしてそれが、ボロ羽織がさらにボロボロになっていくのを加速させてきた要因でもある。

このようにして、予科から続くバンカラ文化・精神を尊重し、さらに強調するため、さらにボロボロの羽織にあえてこうしているという特別感を与えるためにボロ羽織が誕生したと考える。101 代副団長の K②氏はボロ羽織について「ボロ羽織が中心となって応援団は動いている。(中略) ボロ羽織は明治大正から続く予科の精神の象徴であって、北大応援団の在り方そのもの」などと述べており、「ボロ羽織」が予科の文化を引き継ぐ文化的、精神的な支柱として存在していることが分かる。

後述するが、応援数の増加などもこのボロ羽織の誕生の要因の一つであると考えられる。昭和後半にかけて部活動の応援数は増加しており、これもまた羽織の劣化を加速させ、「ボロ羽織」と呼ばれるようになったのではないかと考える。

以上から、予科から続くバンカラ文化の代名詞として、代々引き継がれてきた羽織が、応援などの活動の中で劣化、当てられる布が増えることによって羽織というよりも布の集合体ようになる。そしてボロと呼ばれるようになった羽織に対して、ただのボロボロの羽織ではなく、あえてこの形状なのであるということを強調し、特徴的なコスチュームのような役割を見出したのが「ボロ羽織」なのではないだろうか。

3-3 応援活動における比重の変遷

3-3-1 明治、大正、昭和（戦前）

これまで周囲との関係性、服装・髪型等風貌についての編成を考察してきたが、次に応援団の活動内容に関して考察していく。

谷口（1978）によれば、遊戯会予科応援団として誕生した際の応援団の活動の大半は、遊戯会における、予科の出場者への応援であった。その後、1912 年（明治 45 年）に小樽商業高等学校との定期戦（通称・高商戦。現・商大戦）が始まり、1922 年（大正 11 年）に遊戯会が廃止されると、応援団の活動は高商戦と全国大会を控えた部活動へのインターハイ応援と激励周りの三つがメインになる。

応援団発足当初の応援は有志が応援リーダーを称して応援指揮を行っており、応援内容も野次が中心で、「野次隊」「野次団」などとも称されていた。当時のスケジュールとしては、

⁸ 2023 年 6 月 22 日 T③氏（65 代団長、昭和 48 年～52 年在団）への聞き取り

4, 5 月に高商戦のための打ち合わせや各部活への激励周り、6 月には高商戦が始まり、約 1 週間で終了する。7 月になるとインターハイに参加している各部活動を応援するため、仙台、東京、京都などへ移動し応援を行う。10 月ごろには秋の高商戦が行われ、1 月、冬のラグビー大会応援をもって 1 年の活動が終了するといった様子であった。当時の応援は統率が取れているものではなく、リーダー旗を打ち振っての応援歌の斉唱、高商との野次の応酬、グラウンドに流れこんでのストームなどが行われていた。

また、当時の高商戦は野球、ラグビー、柔道、剣道、テニスなど年月を追うごとに続々と種目数が増加し、その人気は北海道大学、小樽商科大学間の行事の枠にとどまらず、特に野球戦は「北の早慶戦」、「北の一高二高戦」として人気を集め、試合には札幌・小樽の市民の多くが観戦に集まっていた。(谷口 1978)

当時の応援団の活動理念の考察として、大正 13 年発行の桜星会雑誌第 7 号では、応援団の目指すべき方向性について以下のように書かれている。

「抑も抑も我が豫科応援団が團として組織だった活動をするようになってからもう三年になる。人が生れて二十年前後までの進歩一身体に於いても将又智力においても一は實に目醒しいものである。我が応援団も團員諸兄の熱れる成活動によって生れてから見違へるほどの進歩をしたことは事実である。然しこれで満足だとは言はれない。まだまだ吾々応援団の幹部は勿論の事團員諸兄の考ふべき事は多々ある。親愛なる團員諸兄よ！諸君は愛校の血に燃ゆる豫科ボーイではないか。(中略) 諸君は我が團の一人として全校一致の行動をとる権利と義務とを有するではないか。他の如何なる者もこの団体に加はるべき権利もなければ義務もない。それだけこの応援団の委員として活動し得る事は我々団員の名誉に非ずして何んであろうか？(中略) 要するに諸君はもっと生々とした熱のある豫科ボーイになってほしい。」⁹

また、1924 年(昭和 2 年)団則設置時の団員である稲垣是成氏は、このような言葉を残している。

「それまでの応援団幹部役員は、単なる同好の士であった。団長は全団長の指名によって決定され、新団長の下に幹部が組閣される形であった。予科全体に対して新団長・幹部を披露することもしなかった。そこで、私や中村光慶氏を中心となり、応援団を全予科を基盤としたものにするべく、団則を定めることとした。」¹⁰

⁹ 大正 13 年発行 桜星会雑誌第 7 号 「応援団の事報」より。 谷口(1978:13)に収録されたものから引用

¹⁰ 谷口氏による、1924 年(昭和 2 年)団則設置時の団員、稲垣是成氏への聞き取りより。 谷口(1978:18)に収録されたものから引用

さらに、同じく 1924 年（昭和 2 年）団長の中村光慶氏は、応援団に対して以下のように述べている

「應援團と云うものは櫻星會に対立すべくして又同一のものでなくてはならなかった。その意味は櫻星會の一部門である庶務部とか運動部とか言ふ意味ではない事である。ある一つの豫科の行動に対し、それが運動部であらうと、文藝部であらうと、ともに奮ひ、ともに感激に浸る櫻星會の全体の生活だったのである」¹¹

これらのことから、組織的、規模的に発展していった応援団の中で、急速に応援団としての理念が育まれていったように思える。その理念とは、「応援団は予科そのものである」といった理念である。運動部に対しての応援ではなく、かといって単なる物好きが集まるわけでもなく、予科生として、予科生全体を応援しよう、ともに熱意をもって活動していこうといったものである。1924 年（昭和 2 年）に団則が設置され、予科生全体を応援団とすることなどの、明治大正からの応援団の組織的発展もこの考えからくるものであると考えられる。

ではなぜ、このような理念が生まれ、組織的に発展していったのであろうかを考えた時、高商戦が大きな要因であると考ええる。当時の高商戦は札幌・小樽市民にとっても大きな娯楽のひとつであり、両校学生にとっても非常に大きなイベントであった。さらに、大正 11 年に遊戯会が廃止され、遊戯会予科応援団が自然消滅すると、高商戦応援を主眼に置いた北海道帝国大学予科応援団が結成された。ここからも、当時の学生の間で、高商戦が学生生活の中で非常に大きな役割を示していたことを推測できる。また、谷口（1978）によれば、当時の高等学校においてはスポーツ熱全盛期であり、北大予科も例にもれずスポーツ全盛であった。運動部の活動と生活は予科生活の中心であり、昭和 8 年の恵迪寮は、全寮生 187 名中 145 名が運動部員であったほど、予科内でスポーツというものが重要視されていた時代であった。

これらのことから、スポーツ熱が高まっていた予科内で、大規模なスポーツ大会であり、さらに学校同士の威信もかかっている高商戦が予科内で大きな意味を持つことは当然であった。1918 年（大正 7 年）に、東北帝国大学農科大学から北海道帝国大学に昇格し、予科生数も激増、1919 年（大正 8 年）には入学定員が 100 名から 200 名となり、1921 年（大正 10 年）には全予科生数が 600 名となる。この時期から予科自立の気風が著しくなり、これまで本科生も入寮していた恵迪寮が予科生のための寮となる。また各運動部においても予科が独立し、予科運動部が作成されることとなる。これによって、高商戦が北大全学対小樽商業高等学校定期戦から、北大予科対小樽商業高等学校定期戦へと変わっていくのである。

（谷口 1978）

¹¹ 1924 年（昭和 2 年）団長 中村光慶氏回顧録より。 谷口（1978:19）に収録されたものから引用

自然発生的に発足した遊戯会予科応援団は、時がたつにつれて、応援団＝予科生という形の全学的な組織的に発展していく。その理由として、予科生内での自立熱、スポーツ熱の興隆、帝国大学への昇格によるエリート意識の醸成、さらに高商戦が予科生だけの定期戦となったことなどが考えられる。これらの事柄から、当時の予科生の愛校精神や、予科への帰属意識が高まり、さらにそれを加速させるため、また予科生の結束をさらに強化するために応援団という組織が予科生全体のものというように変化していったと考えられる。

3-3-2 昭和（戦後）の応援団の再建とその問題

一度戦争によって解散した予科応援団は、終戦後の 1946 年（昭和 21 年）に再結成され、1949 年（昭和 24 年）に解散。その後は 1951 年（昭和 26 年）に北海道大学応援団として結成され現在に至る。この再結成当初の活動はこれまでと変わらず、インターハイへの遠征応援や、高商戦応援であった。なお、当時は、小樽商業高等学校が戦争中に小樽経済専門学校に解消されていたため、正式には対小樽経専戦であったが、一般市民からは旧来通り高商戦と呼ばれていた。

この高商戦に関して、戦前には行われていなかった「対面式」というものが行われるようになった。対面式とは、大挙遠征してくる相手校応援団を駅前にて出迎え、両校対峙する中で、双方の団長が各々「歓迎の辞」「歓迎の辞に応う」を読み上げ、応援歌交換、「ストーム」などを行った後に市場行進をしながら試合会場に移動するものである。明治大正時代にもグラウンドに両校が並び立った後、両校応援団幹部の交礼握手を行い、選手激励をするといったことは行われていた。しかし、それを「対面式」として名前が付き、一つの儀礼・行事化したのは戦後復活して初の定期戦が行われた 1946 年（昭和 21 年）からである。これは、再び来た平和の時代に精一杯青春を謳歌せんとする予科生の愛すべき稚気の発露であろうと谷口（1978）は述べている。

ここで、ストームについての説明をする。ストームとは当時の旧制高校・大学予科などの内部で流行ったものであり、寮歌などを歌いながら暴れまわるバンカラ文化のひとつであり、今現在でも応援団、恵迪寮に残る文化である。ストームに明確な決まりはなく、時代に応じてさまざまな形式で行われている。札幌に存在する施設である「野外博物館 北海道開拓の村」内の「旧札幌農学校寄宿舍（恵迪寮）」における展示では、スキー板をもってストームの歌を歌いながら寄宿舍内を暴れまわり、寝ている人間を起こすということなどを行っていたと記載されている。また、昭和 27 年～31 年に在団していた K③氏は、「農学部が解体されていて、たくさんの資材があった。それを燃やしてファイアーストームをしていた。」「ストームで電車を止めてた。あの時代はそれが許されていた。」などと述べており、ストームが当時の学生生活に密接に関係していたと推測できる。

北大予科の廃止によって 1950 年（昭和 25 年）に廃止された高商戦は、北海道帝国大学が北海道大学となり、予科応援団が予科廃止と共に解散された後、（通称.商大戦）として復活

した。この商大戦のために応援団が結成され、北海道大学応援団が誕生することとなる。また、3-2「服装・髪型に関する考えの多様化」でも述べたように、新制大学の応援団として出発するにあたって、応援団のスタイルが問題となった。結局は予科応援団の時のスタイルを引き継ぐ形で、リーダー旗、太鼓などを持ち、声を張り上げての応援を行っていた。また、商大戦の復活に伴い結成された北海道大学応援団であるが、応援団長が全教養生によって選挙された以外は組織的にも運営的にも確立されなかった。

当時の応援団の構造は2年生幹部4年制というべきものであり、団長、副団長などの幹部は2年生が当たり、学部移行をめぐり幹部交代が行われるが、幹部を退いた3年4年の学生も応援リーダーとして参加していた（谷口 1978）。予科時代、団長・幹部は3年生が務めていたが、予科が廃止され、教養部になったことで、3年生進級時の学部移行をめぐり幹部交代を行うようになったと考えられる。

しかし、予科の廃止、商大戦のための応援団結成、さらに応援団スタイル問題で予科応援団のスタイルを引き継ぐという決断が、教養部になってから大きな問題を生み出すこととなる。

3-3-3 恵迪寮への専属化（恵迪寮応援団）

戦争を乗り越え、予科の精神を引き継ぎ誕生した北海道大学応援団であったが、昭和30年代になると恵迪寮へその活動の中心を移していく。当時の応援団について、谷口（1978）の中にある、昭和35年度の団長であり、七大戦の開催に尽力した阿竹宗彦氏の回顧録を引用する。

「私が恵迪生活に入った頃（昭和三十四年）、応援団はちょうど一つの転換期を迎えていた。

応援団というクラブ組織は以前からあるにはあったが、いわば恵迪寮が応援団そのものであり、目をむいて組織や体制に奔走する必要がなかった。寮生の中で特に怠慢で、寮歌を愛し、バンカラな者が応援団員であると自他ともにゆるし、またそれでよかった。そういう気風を好む者が恵迪寮を慕ってきた時代であった。応援団が一というより恵迪寮が一扱った年中行事は、春秋の対商大定期戦、春の観桜会、秋の寮祭、水産学部追い出し位なものであり、恵迪寮から離れてやることと云えば新入寮生のための寮歌の紹介だけであった。

しかし、恵迪寮にも次第に現代イズムが流れ出し、寮生気質も個人主義か、脱個性化してくるにつれ、恵迪寮のアパート化の傾向が目立ってきた。寮の催しに参加する寮生も少なくなり、自室に閉じこもり、清潔を好み、昔気質のバンカラな行動を嫌う者が多くなった。このような風潮の中で、一部の者がかたくなに昔気質を振り廻しているのは、むしろ喜劇的でさえある。

私が入寮したのはこんな時である。

依然として素朴なバーバリズムを好み、寮歌を愛し、恵迪寮と青春を共にしたいという者もかなり居た。彼らはしかしながら、何もしない、というより何もできないくせに無理にしようとする応援団には退屈していた。今はなき金山敬一や荒川など、個性的な、一言で云えば旧制高校生タイプの先輩たちと、恵迪寮のいい伝統を継いでいくために私は応援団に入り、その改革にとりかかった。

恵迪寮即応援団という時代が去った限り、応援団組織の確立が必要であった。組織づくりのポイントは全員が一丸となって行動する場を生み出すことである。はっきりとした目的—しかも魅力的な—を持つことである。」(谷口 1978 :129)

この記述を見るに、予科時代において、応援団は予科もしくは恵迪寮生とほぼ同化しており、特段に区別される必要はなかった。しかし恵迪寮生を含む応援団の周囲の学生の気質が変化したことで、応援団にも変革の必要性が生じてきたのである。谷口(1978)によれば、昭和30年代以前の応援団活動は、たとえ大々的活動の場が年2度の対商大戦だけであり、リーダーのほとんどが恵迪寮生であっても、活動対象は教養部学生を中心とする北大生全体であった。しかし、この昭和30年代前半にはいると、理念的にも実践的にも応援団の活動対象は恵迪寮生または恵迪寮生活に向けられることとなる。

この理由として、やはり学生の気質の変化が考えられる。昭和26年の結成時はまだ学生の気質が予科のときとさほど変わっておらず、その理由から応援団は活動スタイルを現状維持とした。しかしそこから10年間ほどで急速に学生の気質が変化し、応援団が引き継いでいた予科のバンカラ文化を良いものとする学生が減少し、「応援団が予科のバンカラ文化の体現者であること」の価値が低下していったと考えられる。また、学生数の増加に伴い、学生生活が多様化し、予科時代のような盛んな学生全体でのスポーツ熱は失われていった。これが「応援団を中心とし、学生全体となって行動する」というような価値を低下させることへつながった。つまり、学生の気質の変化とは、応援団は自分たち(教養部学生、北大全体)の代表、中心であるという考えから、単なる予科の文化を残した自分たちとは異なる団体であるというような考えに変化していったのである。

このような学生の変化に対し、応援団はいまだ予科の文化を色濃く残していた恵迪寮に専属化するという選択肢をとる。これは応援団が、自らこそ古き良き予科文化の体現者であるという考えが根底にあり、周囲の学生の気質の変動に対し、この考え、文化を守るための行動であると考えられる。

さらにこの変動に対して、周囲の学生もしくは自分たちを変えるのではなく、応援団が認められるコミュニティ、つまり恵迪寮へ活動を縮小させた理由は何点か考えられる。一つは北海道大学応援団の結成時の組織形態が明確でなかったことである。応援団の結成理由は、第一が商大戦のためであり、応援団としての活動の中に商大戦があるのではなく、商大戦の為に応援団があった。また、各クラスから選出されていたリーダーたちも有志で集められ、

予科が廃止され教養生となった学生たちを全員応援団員とするのかどうかも決まっておらず、組織が曖昧なまま応援団が組織されてしまったのである。これらのことから、復活した商大戦の為に臨時に組織された応援リーダーたちのサークルに過ぎなかったのである（谷口 1978）。応援団に商大戦以外の明確な活動理念がなかったことで、周囲の変化に対して保守的になってしまったと考える。

もう一つは応援団員に恵迪寮生が多かったことである。そもそも恵迪寮は予科時代にも予科生の 3 分の 1 が入居していたほど、予科内の一大勢力であり、北海道大学応援団結成時の応援リーダーの 7～8 割は恵迪寮生であった（谷口 1978）。また予科の文化を応援団と同じく色濃く受け継いでおり、応援団が活動の中心を移しやすい環境であったといえる。

もう一つは団員数の低下である。谷口（1978）にある記録では、1924 年（大正 13 年）時のまだ全予科生が団となる前の団員数でさえ 904 名中 707 名であり、全予科生が団員であった予科応援団は、活動への参加の度合いを別にして千人をこえる巨大組織であった。しかし、北海道大学応援団として結成された際には、「応援団」と呼ばれていたのは団長・幹部を含め、有志のリーダー達の人数であり、その数は大きく減少している。下の表は谷口（2009）から抜粋した、その年の幹部の人数をまとめたものであり、昭和 20 年代後半では 4 年間分を合わせると 40 名前後になっている。人数が低下したことで応援団の周囲に働きかけられる範囲は小さくなり、それとは逆に北海道大学の学生数は増加したことで、数少ない団員のみでは学生全体に影響を与える事ができなくなる。

表 2 応援団各代幹部数 谷口（2009:39）より作成

年	各代幹部数
昭和 26 年	14 名
昭和 27 年	8 名
昭和 28 年	8 名
昭和 29 年	12 名
昭和 30 年	9 名
昭和 31 年	6 名
昭和 32 年	12 名
昭和 33 年	13 名
昭和 34 年	18 名
昭和 35 年	19 名
昭和 36 年	18 名
昭和 37 年	7 名
昭和 38 年	10 名
昭和 39 年	10 名
昭和 40 年	10 名
昭和 41 年	6 名
昭和 42 年	6 名
昭和 43 年	7 名

昭和 44 年	5 名
昭和 45 年	8 名
昭和 46 年	8 名
昭和 47 年	7 名
昭和 48 年	5 名
昭和 49 年	5 名
昭和 50 年	6 名

(出所) 谷口 (2009:39) より作成

これらのことが、応援団が周囲の学生への働きかけや、活動のとらえ返しなどを行わずに恵迪寮への帰属化という選択肢をとった要因だと考えられる。

この専属化が起こる中で応援団の活動は徐々に、商大戦を含む寮内の行事、応援団としての生活ぶりに重点が置かれるようになる。予科の文化を受け継ぐ存在として、寮生活、応援団として生活することこそが応援団の価値であるというような考えが生まれるのである。

3-3-4 現状打破と「応援活動」の活発化

このような状態を打破するため、応援団を明確な目的を持った組織とするため、応援団は「応援活動」に力を入れるようになる。最初に行われたのは昭和 35 年度団長の阿竹宗彦氏が行った 1960 年 (昭和 35 年) のボート部東京遠征応援、また 1962 年 (昭和 37 年) の七大戦であった。阿竹氏は七大戦の創設に際し以下のようなことを語っている。

「旧七帝戦はこれまでも剣道部、柔道部など伝統ある部では毎日行われていたが、時期や開催場所もまちまちであり、一般の関心も次第に薄れてきてそのうち消滅しそうな傾向にあった。私は体育会の組織を強化し、各部に新しい息吹を入れるには、これを統合し活発化させるのがもっとも良いと判断した。(中略) 北大ばかりでなく、東大、京大以外は北大と同じ境遇にあり、技術レベルも五十歩百歩である点を考慮すると、最も興味ある大会になるはずである。これを総合大会にすれば一般の関心も増すはずであろう。このように考えて体育会の諸先輩や各部のチーフ、学生課の人たちに話をしたところ、趣旨には賛成だが無理な感が強いという答が異口同音に帰ってきた。それで決心がついたのだ。私にとっては趣旨に賛同してもらえるだけで充分だったのである。」¹²

このことから、応援団が「部活動の競技」に対して着目し始めたことが推測できる。部活動の他大学との交流、大会規模を活発化させることで、学内、そして地域の関心を引こうと

¹² 北大体育会誌「北溟」第十号 「七帝戦総合の二年間」より。 谷口 (1978:19) に収録されたものから引用

考えたのである。

谷口（1978）は、この時期に学生の気質がまた変化したと述べている。その変化の理由とは1960年（昭和35年）の安保闘争である。学生はこの安保闘争を契機として徐々に応援活動に無関心になって言ったのである。この変化に対応するため、新しい応援団の形を求め始めた応援団が次に行ったのが応援団構造改革である。

先に第一歩として、1964年（昭和39年）に活動強化のため、2年制から3年制へと移行した。この改革に関して、当時の団長である氏平増之団長の言葉を引用する。

「（前略）それではこれからどのようにしていけばよいのか。それは旧来の観念より脱皮し純然たる応援を徹底化することである。

すなわち体育文化全体に関して北大全体の中に澆漓とした雰囲気を送り込むべく平須らに専心することである。応援範囲は極めて広く、周到なる企画が要求されるが、第一段階としてとるべきことは体育関係応援並びに行事への協力に最善を尽くすことである。

応援は非協力者と応援者いずれの側をも無視しては成立し得ない。吾々はその両者に対し同時にアピールあるいは協力を行い、すべてを合体させ応援の渦中に巻き込んでしまう実力を貯えねばならない。その最も有効な手段は応援機動部隊として動き運動部に対して間接的応援もできるようにする。そして一方体育祭等をより大規模盛大にさせるよう体育会に対し協力し、同時にそうすることにより応援団自身の一般学生への応援浸透を図り次の応援段階への踏み台となるようにする。

このようにして応援団は運動部、体育会、一般学生の間にスムーズな交流と関係が生ずるように三者の仲介者的役割を演ずる。そうした時、ただ一人単純なる応援団活動の展開に関してだけでなく広く学内全体にスポーツというものを通じて旺盛なる生命力を湧きあがらせることができると思う。そして、それ等を通して早く応援団の応援態勢を安定した組織にまで向上させるのが今後1、2年の課題である。」¹³

この文から、応援団が目指そうとした方向性が「体育会文化全体に対して北大全体の中に澆漓とした雰囲気を送り込む」ことであると分かる。そしてその第一段階として「運動部、体育会、一般学生の間にスムーズな交流と関係が生じるように三者の仲介者的役割」を果たす応援団を目指したのである。その仲介者としての行動が応援であり、応援を通じて文化的、精神的に北海道大学を活発化させようとしたのである。

応援団の新たな方向性が決まり、3年制へと変わった応援団は、さらに1965年（昭和40年）に和服リーダー制から学生服スタイルへの変更、ブラスバンド部の設立など様々な改革を行うこととなる。服装の欄で述べたように、応援団が行った改革はあくまで応援団内部で

¹³ 団誌「蠻聲」第53号「応援団今後の方向」 谷口（1978:65）から引用

の活動であり、これまでに付いた応援団への印象は外部からは大きく変わっていなかった。

57 代団長であり、昭和 40 年～44 年にかけて在団した T①氏は「入団する前は応援団が応援する団体だとは思っていなかった。」、「あの姿がかっこいいので入った。」、「正装が学生服になり、そんなものは北大の応援団ではないと言って、自分以外の同期が全員辞めた」などと述べており、外部から見た北海道大学応援団は、予科のバンカラ文化を保存する団体としての印象が服装という形で強く根付いていたのである。

このために応援団は、服装、応援活動を大きく変更させることとなる。応援活動に関しては、これまで羽織、扇子、太鼓などで行っていた応援を、ブラスバンド部を設立し、学生服に白手、演奏に合わせたスマートな応援スタイルをとることにしたのである。

当時の応援に関して T①氏は「応援が主体ではなかった。」、「七大戦や対面式などの行事を除いて寮歌を歌って酒を飲んでというのが活動の多くだった。そのほかにはクラスへの寮歌指導や勧誘活動のためのビラ配りなどがあった。」、「野球部が札幌六大学野球の決勝に進んで、「決勝に行くなら応援に行こう」というノリで応援に行った。」などと述べている。このことから、当時の改革は応援団の組織体制、内部の改革であり、組織として明確な応援への基準などはまだ制定されていなかったように思える。組織体制も整い、応援団としての方向性も確立された北海道大学応援団は、この後応援数や活動の幅をさらに広げていくこととなる。

3-3-5 活動の幅の拡大と停滞

応援という活動を意識し、内部体制や組織の改革に取り組んでいた応援団は、さらに活動の幅を広げていく。人数の拡充のため、3 年制を 4 年制へ変更、大団旗の作成、さらには第 1 回寮歌祭が 1967 年（昭和 42 年）に行われるなど、幅広い活動を行っていく。寮歌祭とは恵迪寮寮歌が学内で歌われなくなったことに対する対策措置であり、第 1 回はクラーク会館で行われ、応援団がリードをしながら学生、教授、OB 等数多くの参加者でにぎわっていた。

しかし、応援団の応援へ於ける更なる拡大の努力は一時的に鈍化する。この鈍化に対して谷口（1978）は 1969 年（昭和 44 年）の大学紛争によるものではないかと述べている。大学紛争によって当時立てていた応援活動拡充の計画はとん挫し、今現在行っている活動を守る、改革以前の状態への逆行が生じ始めたのである。

この時期の応援はブラスバンド部と共に学ラン白手のスタイルで応援するといった、これまでの北海道大学応援団にはない新しい試みがなされていた。そのため、4 年制になった黄痘が再び 3 年制に戻る、ブラスバンド部の分離とそれに伴う羽織袴スタイルへの逆行など、細かい変更が数多くあった。まさに応援団が新しい形を模索し、様々な形を試しながら前に進もうとしていた時代である。

3-3-6 4年制への移行と体育会との関係

1974年（昭和49年）、3年生に戻った北海道大学応援団は幹部の意向のもと、4年制へと移行する。当時の4年制への移行について、昭和48年入学で「応援団史」作成者のT③氏は次のように語っている。

「1, 2年生がああ格好（ボロボロ羽織）をして3年生がフォローする形だった。1, 2年生は中心として動いてもらっているから、3年生になって急に幹部を任される。そうするとこれまでそんなことをあまり考えずに活動してきたから何もわからない。それでようやく自分の中で何かが固まってくるころには引退している。そんな感じだった。」¹⁴

1, 2年生が髪や髭を伸ばし、ボロボロの羽織を着て活動する。彼らは北海道大学応援団の看板として活動しているため、その裏の事務的活動などはすべて幹部が行っている。そのため1, 2年生は自分たちの活動の裏側などを理解せずに幹部就任を迎え、幹部になってからそれまで行っていなかった事務活動を始めて行うこととなるのである。このため、3年生の幹部は慣れない事務活動に追われ、応援団としての活動方針などの考えを活動の中で醸成するには時間が足りなくなってしまうのである。この問題を解決するために4年制という提案がなされたのである。この際に決まった4年制は1, 2年生が予科の伝統的なスタイルで応援し、4年生が幹部、3年生が幹部養成期として活動するというものであり、今現在に至るまで同じ形で続けられている。

このようにして4年制へ移行した北大応援団ではあるが、次に体育会との関係性が問題となる。「体育会文化を通して北大全体の中に潑刺とした雰囲気を送り込む」という応援団の方針は「全学的応援団」と呼ばれるようになる。そして、全学化を進める中で体育会脱退論が提示されたのである。

この部分に関して第59代応援団発行、団誌「蠻聲」第61号から団長の柄谷章氏の言葉を引用する。

「応援団は決して体育会傘下の団体ではない。北大全学の応援団である云々は一貫性がなく曖昧である。全学生の1割にも満たない運動部参加学生と彼らの集合体である体育会、その体育会に何故属しているのかが最初の疑問である。桜星会と応援団の過去の幻想を描いているのか。否定、現実を直視すべきである。

確かに現在の時期に運動部純粹応援から全学対象化方向がある。運動部支援への可逆的に決すれば体育会、現在それは有名無実に近い故に、積極的に働きかけるべき道が開かれる。前者でも後者でもない中間座位にあることは肯定しがたい。体育会問

¹⁴2023年6月22日 T③氏（65代団長、昭和48年～52年在団）への聞き取り

題に関しても今や応援団にとって起点に立っていると思う。」¹⁵

絵柄氏は、全学的応援団を目指す中で、規模が全学の1割にも満たない小規模な組織である体育会の1組織として、運動部の支援を行うのは全学化の方向性に進んでいないのではないかと疑問を呈している。また、運動部純粋応援から、全学を対象にした応援団を目指しているが、その方針が今現在曖昧であり、応援団の方向性が中途半端なものになってしまっているとも述べている。このようにして、体育会との関係性を再度見直すべきと判断した応援団は、体育会との協議を行い、共同声明文を発表する。谷口（1978）によれば、共同声明文発表に至るまでの過程において応援団と体育会のそれぞれの目標が明確となる。応援団の目標は「校風意気の掲揚」であり、その目標の達成のため「北大における学生生活に対して様々の場において、有形無形の応援、援助を行う」ということである。一方体育会の目標は「体育の向上、スポーツの振興」であり、その目標の達成のために「学内運動競技大会の実施、定期戦の実施、運動部に対する便宜」を行うということが明確になったのである。

3-3-7 全学的応援団（応援活動）

こうして体育会との関係を改善させ、全学的応援団の道を歩み始めた応援団は、応援活動を増加させてゆく。応援活動の数、中身という部分と応援への考え方という二つの部分に分けて考えていきたい。

始めに応援の数、中身に関して考えていく。「3-3-4 現状打破と「応援活動」の活発化」のT①氏のコメントにあったように、昭和40年代の応援は商大戦や野球部などが大きな大会の決勝に進んだら行くというようなもので、応援数も少なく、また関係する部活動の範囲も狭かった。谷口（1978）によれば野球部だけでなく、バレーボール、アイスホッケーなどの競技応援も積極的に行い、それぞれの競技に対応した応援方法の開発、遠征する部への駅前での壮行会なども頻繁に行われるようになった。そして昭和の終わりにかけて応援数を徐々に増やし、今現在では40弱の部活動と関係を築いている。

この応援の数と中身について昭和50年代以降の各OBからの聞き取りから考察していく。

「野球、ホッケー、ラグビー、ボート、バレーなんかと関係を持っていた。そのほかは柔道、剣道、とかの武道系の部活だね。交流する機会は多かった」「柔道部なんかは交流として練習見学に行ったりもしていた。」¹⁶昭和50～54年在団 H氏

「4月是新歓、入学式、寮歌指導で、5.6月は寮歌祭と対面式があった。7月8月で七大戦があり、その後は秋リーグの応援かな。」「演劇サークルなんかとも関係があつて

¹⁵ 第61号団誌「蠻聲」「応援団学講座」(p.10)より

¹⁶ 2023年6月29日 H氏（67代副団長、昭和50～54年在団）への聞き取り

講演を見に行くなんかもしていた。」「恵迪寮に応援団の部屋みたいなものがあった、その近くに各部活動の部屋があった。そこで仲良くなった部活動、空手部とかに応援に行ったりもしてたかな。」¹⁷昭和 52～56 年在団 K①氏

昭和 50 年代後半までは、部活数は現在に比べるとまだ少なく、その代わりに現在に行っていない文化系サークルとの関係性があることが確認できる。これは全学的応援団を目指す中で、体育会だけでなく、文化系とも交流していこうという意志の表れではないかと推測できる。

「週 5 で部活を行い、週 1 で団会（会議）をしていた。その会議でどこの応援がいつあってどうやって行くかを話し合っていた。」「卓球、柔道、ボート、男女バレー、アメフト、ラグロス、サッカー、アイスホッケー、ハンドボールなんかも行っていた」「当時は応援は野次が多かった。今ほど楽曲は多くはない。」¹⁸

昭和 57～63 年在団 M①氏

「商大戦の応援がかなり重要視されてた。あそこがメイン。剣道部の壮行会を駅前でやったのも思い出深い。」「応援数はいまと全然違う。今のほうがもっと多い。」¹⁹

昭和 60～平成 2 年在団 T②氏

昭和 50 年代前半と、50 年代後半～60 年代を比べると、応援する部活動が増えていることが分かる。全学的応援団を目指す中で、応援団はその活動規模を徐々に拡大させていったのである。

「4 月の部活説明会が終わると寮歌祭、そして札幌六大学野球や春リーグ応援があって、商大戦。七大戦の応援をして、秋リーグ、冬の受験生激励ステージって感じかな。」²⁰平成 6～10 年在団 N②氏

「七大戦の為に結団式っていうのをやっていた。各部活のキャプテンとかを集めてコンパをして七大戦に向けて意気込むというのをやっていた。」「97 代くらいから応援の数が確か増えたんだよね。行ける応援には全部行こうってなって、30～40 くらいはあったんじゃないかな。」²¹平成 21～25 年在団 K②氏

¹⁷ 2023 年 5 月 25 日 K①氏（69 代、昭和 52～56 年在団）への聞き取り

¹⁸ 2024 年 7 月 31 日 M①氏（74 代、昭和 57～63 年在団）への聞き取り

¹⁹ 2023 年 6 月 7 日 T②氏（78 代団長、昭和 60～平成 2 年在団）への聞き取り

²⁰ 2024 年 7 月 23 日 N②氏（86 代副団長、平成 6～10 年在団）への聞き取り

²¹ 2023 年 6 月 13 日 K②氏（101 代副団長、平成 21～25 年在団）への聞き取り

「応援吹奏団と協力して、新しいマーチを作ってた。2曲分くらい。各部活動との連絡は先輩から引き継いでもらうか、SNS とか知り合い越しにキャプテンとつなげてもらった。」「週4で活動、土日は応援があったらいくって感じ。春秋リーグどちらも行っていた。」「応援形態や楽曲、部活に合わせた応援方法などを考えたりもしていた。」²²平成28～31年在団 N①氏

平成に入ると97代にあった応援の増加以外にも、春リーグなどの応援も行われるようになったことが分かる。さらに応援吹奏団との関係性も強化し、2団体がさらに協力して応援活動を充実させていくことになるのである。

全体を通して、応援の数では、97代を一つのきっかけにして応援数が増えているように感じる。団誌「蠻聲」にある活動報告からもその数の増加や種類の幅が見て取れる。昭和60年12月7日、第75代応援団発行の「蠻聲」第72号では、商大戦、七大戦の応援を含め、おおよそ20～30団体ほどの部活動と関係を持っていた。平成4年12月22日、82代発行の「蠻聲」では30団体前後、平成16年2月10日、第93代応援団発行の「蠻聲」では詳細には記載されていないが、おおよそ20弱との団体との関係を持っている。93代の頃に関しては、後述するが、この時期は人数の減少が激しく、活動の幅が狭まってしまったのではないかと推測できる。この「蠻聲」は活動報告を載せたものと、新歓用パンフレットとして作ったものの2種類が存在し、途中から活動報告が存在しないものがあるため、正確な数を出すことはできないが、昭和50年代から現在に至るまででおおよそ2倍弱ほど競技数が増加している。これまでの応援は決勝や七大戦、商大戦といった行事での応援が多かったが、応援数を拡大させるという意図の元、春リーグ、秋リーグなども応援対象に入っていることなどから、競技数だけでなく、実際の応援数もかなり増加していると考えられる。

また注目すべき点としてサークルとの関係性も考えられる。K②氏の演劇サークルとの交流をはじめ、82代発行の「蠻聲」にもオーケストラ部との関係性が書かれている。文化系サークルへの活動は、現在は行っておらず、これも人数の低下が招いた断絶なのではと推測できる。

さらに、応援方法の幅の増加なども考えられる。かつては楽器と太鼓と野次などがメインであったが、そこから部活ごとに合わせた応援方法を考えたり、応援吹奏団（分離したブラスバンド部）との協力関係を強化したりする等、応援の幅、種類という点で応援活動はさらに発展していく。これは応援する団体数が増加したことなどにより、部活ごとに効果的な応援方法に違いがあったり、スポーツのルール上、応援に制限がかけられるためであると考えられる。

次に応援の中身についてもOBの聞き取りなどから考察する。

「校風意気の掲揚というのを掲げていた。わかりやすく言うと北海道大学の学生生

²² 2024年7月8日 N①氏（108代副団長、平成28～31年在団）への聞き取り

活をもっと豊かにしていこう、北大を盛り上げようという思いだった。その思いは今も変わっていない気がする。」「単なる競技応援団にはならないようにしようと当時話していた。」「対面式をかなり重要視していた。」²³昭和 48～52 年在団 T③氏

「応援とは、誰かを応援する尊い活動であり、人間らしさの涵養につながる。」²⁴
昭和 50～54 年在団 H 氏

「応援団を全学的なものにしようという考えが団内で生まれていた。しかし、団内でもこれまで通り（酒を飲んで歌を歌っている）でいいという考えがあり、対立していた。」「北大全体を応援する「北大の」応援団という側面と、蓬髪長髯のこれまでの歴史的、伝統としての応援団どちらも両取りしようと思っていた。」²⁵
昭和 52～56 年在団 K①氏

この時期までは、伝統としての応援団でよいという考えと、全学的応援団を目指すべきという考えが対立しており、応援団内でも様々な意見が対立していた。その対立の中で、少しずつ応援団は、全学的応援団という方向性に一本化していく。

「応援団は運動部や、クラス、学内をつなげるネットワークのような役割」²⁶
昭和 57～63 年在団 M①氏

「北大全体を応援する応援団として活動していた。応援をするというよりも北大の応援団というイメージが強かった。」「対面式が活動の中心だったなあ。そこを一番重要視していた。」²⁷昭和 60～平成 2 年在団 T②氏

これら二つの聞き取りから、全学応援団という考えが昭和 50 年代から平成初期までの間で、団全体に浸透してきたことが分かる。また、T③氏が述べている「単なる競技応援団にならないようにしよう」という考えが継続されていることも見て取れる。単純に部活動を応援することを主目的とするのではなく、あくまで応援を通して、学内全体を活発化させるという初期の方針が継続されている。

「北海道大学の応援団として、北大全体をより盛り上げていこうという思いだった。そのためのアプローチとして、寮歌指導であったり、応援であったり、対面式などの

²³ 2023 年 6 月 22 日 T③氏（65 代団長、昭和 48 年～52 年在団）への聞き取り

²⁴ 2023 年 6 月 29 日 H 氏（67 代副団長、昭和 50～54 年在団）への聞き取り

²⁵ 2023 年 5 月 25 日 K①氏（69 代、昭和 52～56 年在団）への聞き取り

²⁶ 2024 年 7 月 31 日 M①氏（74 代、昭和 57～63 年在団）への聞き取り

²⁷ 2023 年 6 月 7 日 T②氏（78 代団長、昭和 60～平成 2 年在団）への聞き取り

行事などがあると思っている。応援や寮歌を通じて北大を好きになってもらおうと考えていた。」²⁸平成 21～25 年在団 K②氏

「北大を盛り上げるという方針だった。寮歌とかの予科の文化が好きな人、応援が好きな人、北大が好きな人等 3 種類くらいがいて、その 3 種類の人がバランスを保ちながら応援団が行動していた気がする。」²⁹平成 28～31 年在団 N①氏

これらのことから、校風意気の掲揚、北海道大学を盛り上げる、大学全体の活発化と様々な言い方ではあるが、理念については全学化応援団の道を歩み始めた昭和 50 年代から、さほど変化していないものと考えられる。また「単なる競技応援団にはならない」、「そのためのアプローチとして応援がある」といったように、応援をあくまで一つのアプローチとして置き、応援が主目的にならないようにという意識があることも読み取れる。

これらから考えられることとして、北海道大学応援団は昭和 50 年代以降、校風意気の掲揚を目的に精力的に活動の幅を広げていく。そしてその理念は大きくは変わらず拡大が平成に入るまで続き、平成後は応援内容の幅の拡大へとつながってゆく。応援の幅の拡大へと移行した理由は、応援団と関わる部活動の数が増えたため、応援活動もそれに合わせて多様化したためだと考えられる。

3-3-8 小樽商科大学定期戦の活動における比重の変遷

ここからは、競技応援以外の活動についてその中身の変化について考えていく。競技応援以外の活動において、小樽商科大学定期戦、通称商大戦についての活動における比重が変わっていることにも注目したい。定期戦誕生時の明治大正時代、昭和 30 年代頃までにかけては、定期戦は非常に人気で、学内のみならず、札幌、小樽市民全体で人気を博していた。予科応援団解散後に応援団が結成された理由、並びに応援団構造改革で寮歌部という形で予科応援団のスタイルが残された理由は、小樽商科大学応援団との定期戦（対面式）のためであり、それほどまでに応援団にとって定期戦が重要視されていたことが分かる。昭和 27 年～31 年で在学していた K③氏は「パレードなんかも応援団が呼び掛けずに、歩いているうちに勝手に学生が集まってきた。応援団が動くというよりも、学生が動いて、その中に応援団が存在しているというような形だった。」、「当時はよく北海道新聞に定期戦のことが載っていた。」、「市民がかなり集まっており、一つの巨大なイベントになっていた。」と述べており、定期戦が応援団のみならず、学内外でも非常に人気を博していたことがうかがえる。

谷口（1978）によれば、1960 年（昭和 35 年）の安保闘争を境として学生の気質や生活ぶりに変化が生じ、商大戦の行事や応援を積極的に参加する学生数が減少し始める。この結

²⁸ 2023 年 6 月 13 日 K②氏（101 代副団長、平成 21～25 年在団）への聞き取り

²⁹ 2024 年 7 月 8 日 N①氏（108 代副団長、平成 28～31 年在団）への聞き取り

果商大戦は低迷化し、戦後の 1946 年（昭和 21 年）の商大戦で初めて行われた「対面式」のみが学内外の見世物としての興味に支えられて続行されることとなる。

この課題を解決するため、1976 年（昭和 51 年）に商大戦再建の努力が行われる。総合対校戦としての実行委員会の発足、学内外への宣伝、など行い、商大戦は総合対校戦としての性質を取り戻すこととなる。当時の商大戦について当時の各 OB は以下のように述べている。

「応援団は小樽商科大学との定期戦が根源にあると思っている。平成に入ってから定期戦がなくなってしまったでしょ。商大との関係性が切れてしまったことが平成からの応援団に大きく関係すると思うんだよね。」³⁰

昭和 48～52 年在団 T③氏

「商大の知命寮っていう寮があって、対面式や商大戦で小樽に行ったときによくその寮生と絡んでいた。」³¹

昭和 52～56 年在団 K①氏

「商大戦をかなり重要視していた。」「商大とはとても密接にかかわっていた。年に 10 回以上小樽には行ったし、商大の応援団の奴らと酒を飲んだのはもう数えきれないくらいある。」³²昭和 60 年～平成 2 年在団 T②氏

このように昭和 50 年代から平成の初期にかけて、商大戦は応援団の活動の中でとても重要視されていたことが分かる。一般観客や部活生以外の観客を巻き込んだものにしようという考えの元、対面式なども行われており、部に保存されている式次第でも、この時期の対面式の式次第には、一般対抗種目などが記されている。

しかし、総合対校戦としての商大戦は 1999 年（平成 11 年）に一度断絶する。この理由は、小樽商科大学応援団が団員数の低下により消滅したためである。この断絶によって、商大戦は総合対校戦としての役割を失い、ただの各部ごとに行っている商大と北大の定期戦になってしまったのである。2010 年（平成 22 年）に小樽商科大学応援団が復活し、対面式が再開されるようになったが、今現在行われている商大戦は対面式と各部の定期戦のつながりは存在せず、それぞれが独立して行われている。応援団も応援には行くが、総合対校戦として各部活の勝利について発信するなどはなく、あくまで、1 応援として応援に行くというような形である。

商大戦復活以後の 2 名の OB は、商大戦を含む応援活動について、以下のように語ってい

³⁰ 2023 年 6 月 22 日 T③氏（65 代団長、昭和 48 年～52 年在団）への聞き取り

³¹ 2023 年 5 月 25 日 K①氏（69 代、昭和 52～56 年在団）への聞き取り

³² 2023 年 6 月 7 日 T②氏（78 代団長、昭和 60～平成 2 年在団）への聞き取り

る。

「七大戦に向けての合宿なんかもしていた。対面式は自分のひとつ前、99 代の時に復活した。」「結団式といって、各部活動のキャプテンや部長などを集めて、七大戦に向けた決起会などを行っていた。」³³平成 21～25 年在団 K②氏

「新歓、春の札六、春リーグときて対面式、そして七大戦というスケジュール。七大戦で引退していた。」「やはり七大戦が一番楽しかったな。自分の時は九州に行っていた。」³⁴平成 28～31 年在団 N①氏

平成 11 年度以降の、対面式復活後の OB への聞き取りから、応援団の活動の比重が商大戦メインから競技応援、七大戦などの応援へ変わっていったように見受けられる。その要因として、小樽商科大学応援団の消失が考えられる。小樽商科大学応援団の消失に伴い、商大内部で総合対校戦として学内をまとめる集団がいなくなり、総合対校戦としての面が崩れ去ったのである。そのため、対面式消失後の北大応援団は、活動の比重をそのほかの応援へ向けることになり、応援数の更なる増加、応援内容の充実などに力を入れるようになったと推測できる。

このように対面式は応援団にとって非常に重要度の高いものであった。総合対校戦として学生の結束を強め、全学的応援団の誕生につながった点、同じバンカラストイルの小樽商科大学応援団がいることで、寮歌部が作成され応援団の予科文化の保存につながった点など様々な点で応援団と関係していた。しかし、1999 年（平成 11 年）から 2010（平成 22 年）まで続く長い断絶により、他の応援への比重が増し、数ある行事の一つという立ち位置に落ち着くことになるのである。

3-3-9 応援団とその周囲における寮歌への認識の違い

応援団の活動において、寮歌というものは密接に関係している。予科時代から今に至るまで、活動の中で寮歌は歌われ続けており、明治 45 年度寮歌「都ぞ弥生」を中心に、様々な寮歌が、応援、壮行会、コンパの場などで歌われている。

寮歌についても使われ方、意識が変わっているのではないかと考え、聞き取りを行った。

「酒を飲んで寮歌を歌うのが応援団だと思っていた。」「応援する団体だとは思っていなかった。」³⁵昭和 40～44 年在団 T①氏

³³ 2023 年 6 月 13 日 K②氏（101 代副団長、平成 21～25 年在団）への聞き取り

³⁴ 2024 年 7 月 8 日 N①氏（108 代副団長、平成 28～31 年在団）への聞き取り

³⁵ 2023 年 5 月 21 日 T①氏（57 代団長、昭和 40～44 年在団）への聞き取り

昭和 40 年初めは、恵迪寮専属応援団の考えがまだ団内に存在し、応援団としての生活ぶりが重要視する人物も存在していた時代である。そのため、寮歌は応援団の活動と密接に関係したものであり、寮歌を歌うことが応援団の存在意義のひとつであるといった考えがあるのが見受けられる。

「時代の中で変わっていないものがあって、それを歌っているのが寮歌だと思う。」

³⁶昭和 50 年～54 年在団 H 氏

「作られた歌の歌詞を見て、それが世相を反映していて、感激したことがある。北大生の歌として全学に広めようとしてた」³⁷昭和 52～56 年在団 K①氏

「寮歌祭を見て、これこそが北大生に必要なものだったと思う。」³⁸

昭和 60～平成 2 年在団 T②氏

昭和 50 年代からは、応援団の方針として全学的応援団を目指す中で、これまでの寮歌を歌うことが応援団であるという意識に加え、寮歌を「北大全体の歌」として広げていこうという意識が芽生えていったように見える。また、2010 年（平成 22 年）までは寮歌祭というものが存在していた。寮歌祭とは、食堂などで寮歌を歌う行事の事であり、応援団を中心として教養学生の多くが参加する巨大な行事であった。この寮歌祭がなくなるまでは、寮歌祭で応援団を知って入団するといった OB も存在している。

「自分の時代は応援の車の中で、洋楽とかかけてたよ。寮歌は好きだったけどそれをずっと聞いてるって感じではなかった。多様化したんだと思う。」³⁹

平成 6～10 年在団 N②氏

N②氏の発言から、寮歌以外の音楽が多様化し、学生が気軽に様々な音楽に触れられるようになって来たことが分かる。

「99 代まで全学寮歌祭っていうのがあった。教養食堂がなくなっちゃって寮歌祭もなくなったんだけど、朝までストームとかしてたらしい。」「寮歌は北大の精神そのも

³⁶ 2023 年 6 月 29 日 H 氏（67 代副団長、昭和 50～54 年在団）への聞き取り

³⁷ 2023 年 5 月 25 日 K①氏（69 代、昭和 52～56 年在団）への聞き取り

³⁸ 2023 年 6 月 7 日 T②氏（78 代団長、昭和 60～平成 2 年在団）への聞き取り

³⁹ 2024 年 7 月 23 日 N②氏（86 代副団長、平成 6～10 年在団）への聞き取り

のであり、同じ北大生が作っている。それを普及などで伝えて、北大生としてのアイデンティティを持ってもらおうと思っていた。」⁴⁰平成 21～25 年在団 K②氏

「寮歌を一般の学生全員に昔みたいに普及するのは難しいと思っていた。エンターテインメントの種類が増えて、そこらへんにいろんな音楽や娯楽があるから。」⁴¹
平成 28 年～31 年在団 N①氏

平成後半の OB の発言からも、寮歌に対する意識はさほど変わっていないことがわかる。しかし、寮歌祭がなくなったこと、技術の発展で、学生が音楽や娯楽にさらに触れやすくなったことで、寮歌の普及が昭和の時代に比べて難しいという感覚であったこともよみとれる。さらに 82 代応援団発行、平成 4 年の「蠻聲」から、以下の文を引用する。

「世の中が、人間が変われば当然その人間が集う大学も変わっていく。過去を振り返るのはあまりいいことと思わないし好きではないのだが…。近頃、大学自体に活気、言い換えれば学生に力がなくなってきた持たなくなってきたと言われる。ひとつの事にわあーと集まり盛り上がるのが無い。(中略) 北大生 1 万人はどこに行ったのか。

こんなことはもうずっと言われつくされているのだろう。人間・学生の価値観が多様化しているのだ。興味がいろいろなものに向けられているのだ。

「時代が変わってきたのだ。」

寮歌は間違いなく北大の財産であると思う。(中略) それさえも、今や時代の流れに押し去られようとしている。寮歌指導にクラス入りする、習慣に出ていく北大生がいる。「都ぞ弥生」を歌えない歌わない北大生がいる。」⁴²

これらから、応援団内での寮歌に対するとらえ方はさほど変わっておらず、予科の精神を引き継ぐという文化的面、寮歌というものを北大全体に広め、北大を盛り上げることに繋げるという全学的応援団の面などの二つが意識として存在していると考えられる。また昭和 40 年代の OB の聞き取りから、応援団の生活ぶりを応援団の活動意義としていた時代では、やはり活動の中に寮歌が強く入り込んでいるように見受けられる。

予科時代は予科生＝応援団であったことも踏まえ、商大戦などの様々な機会でも予科全体で寮歌を歌っていた。(谷口 1978) 予科時代は寮歌＝予科全体の歌という認識であったと言える。しかし昭和から平成に向かうにつれ、学生生活の多様化からか、周囲の学生たちの中で、寮歌の知名度が低下しているように見受けられる。特に平成に入るところには、応援団と一部の体育会の学生のみが知っているという状態になっている。これは、寮歌が学生の中で

⁴⁰ 2023 年 6 月 13 日 K②氏 (101 代副団長、平成 21～25 年在団) への聞き取り

⁴¹ 2024 年 7 月 8 日 N①氏 (108 代副団長、平成 28～31 年在団) への聞き取り

⁴² 団誌「蠻聲」第 78 号 団員個人感想「時代おくれ」(p.23) より

「北大生の歌」というよりも「一部の北大生が作っている歌」というような、いわば恵迪寮に専属化した時の応援団と同じようなものになっていると考えられる。

3-3-10 全学応援団を目指す中でコンパに付与された価値

谷口（1978）によれば、応援団が応援活動に注力する中で、昭和 50 年ごろからコンパというものが重要視され始める。応援団と各部との人間的交流を深めたいという声の両者から出るようになり、画期的な試みとして、第 64 代幹部の時に硬式野球部、準硬式野球部との親睦コンパが行われたのである。

応援団が恵迪寮専属応援団になる前までの活動では、高商戦（現・商大戦）や、各部活動の大会優勝後に予科全体でのコンパがあり、戦勝の時は狸小路の随所に酒樽やビール樽が置かれてふるまわれ、都ぞ弥生を夜遅くまで歌っていた（谷口 1978）。応援団の活動というよりも予科全体での活動であり、そこに意図などは存在していなかった。恵迪寮へ活動の幅を縮小させた時代もコンパは存在していたが、それは応援団の生活ぶりという者が重要視されており、応援団の内面寄りの考えのもとでのコンパであった。昭和 40～44 年在団の T①氏の「応援団は酒を飲んで寮歌を歌っている団体だと思っていた。」という発言からもそれが読み取れる。昭和 50 年代の応援活動への注力をしていこうという考えから、応援をする対象である各部活動と関わる機会のひとつとしての価値がコンパに付与されたのである。平成 28 年～31 年で在団されていた N①氏は「コンパやクラスなどで部活生と仲良くなる。そうすればより応援が楽しめるし、向こうも楽しんでもらえる。」と述べており、コンパによって応援団と部活生、さらには一般学生間をつなぎ、北大を盛り上げるという応援団の意図が存在していると考えられる。

3-3-11 入団理由と人数の低下

谷口（2009）によれば、応援団の団員数は平成に入ってから減少の一途をたどっている。

表 3 応援団各代幹部数

年	各代幹部数	年	各代幹部数
昭和 26 年	14 名	昭和 54 年	7 名
昭和 27 年	8 名	昭和 55 年	7 名
昭和 28 年	8 名	昭和 56 年	9 名
昭和 29 年	12 名	昭和 57 年	5 名
昭和 30 年	9 名	昭和 58 年	7 名
昭和 31 年	6 名	昭和 59 年	4 名
昭和 32 年	12 名	昭和 60 年	7 名

昭和 33 年	13 名	昭和 61 年	9 名
昭和 34 年	18 名	昭和 62 年	6 名
昭和 35 年	19 名	昭和 63 年	2 名
昭和 36 年	18 名	平成元年	3 名
昭和 37 年	7 名	平成 2 年	1 名
昭和 38 年	10 名	平成 3 年	5 名
昭和 39 年	10 名	平成 4 年	3 名
昭和 40 年	10 名	平成 5 年	4 名
昭和 41 年	6 名	平成 6 年	5 名
昭和 42 年	6 名	平成 7 年	4 名
昭和 43 年	7 名	平成 8 年	6 名
昭和 44 年	5 名	平成 9 年	2 名
昭和 45 年	8 名	平成 10 年	2 名
昭和 46 年	8 名	平成 11 年	2 名
昭和 47 年	7 名	平成 12 年	1 名
昭和 48 年	5 名	平成 13 年	3 名
昭和 49 年	5 名	平成 14 年	2 名
昭和 50 年	6 名	平成 15 年	2 名
昭和 51 年	9 名	平成 16 年	2 名
昭和 52 年	7 名	平成 17 年	3 名
昭和 53 年	5 名	平成 17 年	3 名

(出所) 谷口 (2009:39) より作成

この表から、平成はいつから各代の団員数が減少していることが分かる。特に平成 10 年代は団員数が少なく、代によっては団長を 2 年連続で続けている代も存在している。

この理由として、いくつかの要因が考えられる。一つは商大戦の消滅である。小樽商科大学応援団が 1999 年 (平成 11 年) に消滅し、一大イベントであった商大戦がなくなったことで応援団を知るという機会が減ったことも関係しているのではないかと考えられる。

二つ目は学生の生活の多様化である。部活・サークル数などが増え、新入生が選べる選択肢が増加したことも応援団の団員数の減少に関係していると考えられる。

この二つを裏付けるものとして、OB の入団理由を記載する。

「入学前から知っていた。東京の試験会場で入寮志願書を配っていた北大応援団を見たのが最初のきっかけ。」⁴³昭和 40～44 年在団 T①氏

昭和 40 年代は、応援団が東京の試験場にまで出張し、入寮志願書を配っていた。T①氏の話によれば、当時の恵迪寮は寮で入寮者を決定しており、寮内に応援団部屋が存在していたこともあって、応援団は入寮兼入団の勧誘として入寮志願書を配っていた。

⁴³ 2023 年 5 月 25 日 T①氏 (57 代団長、昭和 40～44 年在団) への聞き取り

「札幌市民として幼少期から北大の応援団を見ていてあこがれがあった。その憧れのまま大学に入ったら応援団に入ろうと思っていた」⁴⁴昭和 48 年～52 年在団 T③氏

札幌市民として昔から応援団を見てきて、その姿に憧れ、その憧れのまま入団するというケースも存在する。

「入学前は応援団のことは知らなかったが、当時仮宿といって寮に泊まれて、そこで応援団の人と関わる中で人間的魅力にひかれ入団した。」⁴⁵昭和 50～54 年在団 H 氏

「寮歌祭で知った。寮外に住んでいたが、これを見て応援団に入りたくなり入団するとともに入寮した。」「寮生じゃない団員は何人かいた。」⁴⁶昭和 52～56 年在団 K①氏

「高校受験の時に『蛍雪時代』という雑誌を見て、そこ北大応援団を知った。北大じゃなきゃ応援団はやってなかったと思うな」「寮には住んでなくて、27 条あたりに住んでた。でも半分以上は寮で寝泊まりしていたな。」⁴⁷昭和 57～63 年在団 M①氏

これらの聞き取りにもあるように、寮外生の応援団として活動する団員、もしくは寮外に住んでいたが、入団を機に入寮するという団員も存在していた。恵迪寮専属応援団の際は応援団員＝恵迪寮生であったが、少しずつ恵迪寮生以外の応援団員も増えていっていることが分かる。

「もともと対面式の映像をテレビかなんかで見てそこからだね。あの格好にウワーと惹かれてしまって」⁴⁸昭和 60～平成 2 年在団 T②氏

「前期試験の時に寮で茶話会といって学生をもてなすのがあって、そこで応援団のステージを見て興味を持ったって感じだった。」⁴⁹平成 6～10 年在団 N②氏

これまでから入団の理由は大きく 3 パターンに分けられる。

「入学前の茶話会か、入学してから知ったって感じ。応援団に入ろうとは考えていな

⁴⁴ 2023 年 6 月 22 日 T③氏（65 代団長、昭和 48 年～52 年在団）への聞き取り

⁴⁵ 2023 年 6 月 29 日 H 氏（67 代副団長、昭和 50～54 年在団）への聞き取り

⁴⁶ 2023 年 5 月 25 日 K①氏（69 代、昭和 52～56 年在団）への聞き取り

⁴⁷ 2024 年 7 月 31 日 M①氏（74 代、昭和 57～63 年在団）への聞き取り

⁴⁸ 2023 年 6 月 7 日 T②氏（78 代団長、昭和 60～平成 2 年在団）への聞き取り

⁴⁹ 2024 年 7 月 23 日 N②氏（86 代副団長、平成 6～10 年在団）への聞き取り

かった。」⁵⁰平成 21～25 年在団 K②氏

「入学するまで知らなかった。新しいことをやろうと思っていてその中ですごい勧誘されたからだね。囲われて勧誘されて断るにも断れなくなっていた。」⁵¹

平成 28～31 年在団 N①氏

これらから、平成の初期までは、応援団というものを入学前に知っていた人間が多く、その姿に憧れての入団が多い。しかし、平成に入った後は前期試験後の茶話会というイベントで知るもしくは入学式や寮などの入学後に知るとことが多い。これは先ほど挙げたように学生の生活が多様化して選択肢が増え、応援団を知る機会が減少したこと、さらに応援団という選択肢を選ぶことが減少したためだと考える。

3-3-12 周囲との関係性から変化する応援団の理念とその活動

これまで応援団の活動とその活動理念についてみてきたが、長い歴史の中でこの二つは大きく変動している。

遊戯会の中で自然発生的に誕生した遊戯会予科応援団から始まる、当時の応援団の活動理念は非常に緩く、また自由なものであった。その活動は予科内での応援に始まり、続いて小樽商業高等学校（現・小樽商科大学）との定期戦応援へとシフトした。この定期戦は、学校と予科の威信をかけたものであり、当時スポーツ熱が高まっていた予科全体にとって非常に重要視されていた。このため予科応援団は予科生全体で一致団結し、予科全体で活動することを目的とし、全学的な応援団を目指していく。この結果、組織規模は拡大し、1924 年（昭和 2 年）の団則設置によって全学的応援団としての一面を応援団は手に入れる。その時の活動内容は小樽商業高等学校との定期戦とインターハイを迎える部活動に向けての激励周り、またその応援であった。当時の応援は組織的というよりも、団長・幹部などの下に有志が集まり、野次などで応援するという形であった。寮歌や、コンパなども応援団というよりも予科生全体で共有されるものであり、応援団と予科生はほぼ一体であった。

このようにして、全学的応援団として予科の代表的な一面を有していた予科応援団であったが、予科の廃止、新制大学への変更などからくる学生の気質の変化によって、学生たちからその行動などが受け入れられなくなる。商大戦の為に結成された北海道大学応援団は、徐々に学内で孤立し、予科の文化を色濃く残していた恵迪寮に帰属、恵迪寮専属応援団となる。当時の活動のほとんどは商大戦を含む寮内行事がメインであり、インターハイなどの応援ではなく、応援団の存在意義をその生活ぶりに向けることとなる。予科の代表者としての

⁵⁰ 2023 年 6 月 13 日 K②氏（101 代副団長、平成 21～25 年在団）への聞き取り

⁵¹ 2024 年 7 月 8 日 N①氏（108 代副団長、平成 28～31 年在団）への聞き取り

自負があったからこそ、予科時代のバンカラ文化を大切にし、その生活を行うことが応援団の意義であるといった考えが生まれるのである。

この状態から脱却し、応援団を改革するため、昭和 30 年代後半から、ボート部の全国大会への応援を発端として、七大戦の開催、応援団構造改革など様々な形で改革が進められていく。その中で、再び全学的応援団を目指そうという考えが生まれてくるのである。この時に応援に対しての意識の変化が起こる。これまでは応援という者は「頑張っている北大生、友達を応援する」といったような、友人としての、いわば応援団の活動における責務というような意識は存在していなかった。しかし、全学的応援団を目指す中で、これらによって「応援活動などによって北大全体に澁漉とした雰囲気を送り込む」ことで、応援団の目的を果たそうというように、応援団内で意識が変わったのである。

このようにして応援に重きを置くようになった応援団は、応援種目、応援内容の充実など応援の幅の拡充を精力的に行っていく。しかし、その一方で小樽商科大学応援団の断絶による商大戦、対面式の停止、学生の寮歌への関心の薄れ、団員数の低下などにより、これまで応援団の活動における比重が変動する。具体的には、これまで応援団の活動の中心に存在していた商大戦が総合対校戦としての意味合いを失ったことも含め、商大戦の重要度が低下するのである。そしてその反面、競技応援や七大戦、非応援者である部活動との関わりであるコンパなどを含んだ様々な活動が、並列的に存在するようになる。

これらから応援団の活動に対する意識には、大きく二つの意識が存在しており、その二つのバランスが変わったことにより活動に変化が生じていると考えられる。一つが「校風意気の掲揚」、「北海道大学を盛り上げる」といった意識である。予科時代から予科生として同じ同胞を応援しようという意識は存在しており、それが予科時代は商大戦などにおいて予科全体で共有されていた。しかし昭和 30 年代前半で、学生の気質が変わったことによって学生の意識が応援団から離れる。

ここでもう一つの意識が強くなっていくのである。それが「予科文化の伝統を引き継ぐ存在」としての応援団である。予科解散後の北海道大学応援団の結成理由は「明治から行われている商大戦を行うため」であり、そのためには商大戦とインターハイをメインに活動しており、予科の代表として見られていたこれまでの予科応援団の立ち位置などから、このような意識が生まれてきたと考えられる。しかし、学生の気質の変化によって、予科の文化を保存する応援団は学内で孤立していく。そうした結果、寮歌を歌いストームをするといった、その応援団としての生活ぶりに活動の重きを置くようになる。すなわち、予科のバンカラ文化を生活でも表現することこそが応援団の存在意義であるという考え方である。

恵迪寮専属応援団から脱し、全学的応援団を目指すという意識が強くなってきたのは昭和 30 年代後半からである。そしてその方法として「競技応援」により重きを置くようになる。その結果、応援数の増加、部活動との交流の機会としてのコンパや、対面式のみとなっていた商大戦の総合対校戦としての再建などが行われるようになる。この時期は体育会系のみならず、文化系サークルとも関係性を持っていたようである。このようにして活動の幅

を広げるようになった応援団であるが、人数の低下、商大戦の消滅などにより、より競技応援への比重が増す。応援団の活動において、特に七大戦などの比重が徐々に増してくる。また関係性を持っている団体も部活動がほとんどとなり、競技応援という意識をこれまでの歴史の中で一番強く持っているのが今であると言える。

このように応援団の活動は大きく変化してきた。長い歴史の中で、周囲の学生との関係が変化し、それに合わせる形で応援団が変化してきたということであり、応援団が時代に取り残されるのではなく、自分たちを変えながら時代に適合していったと言える。

4 結論

本研究では、全国的に見ても珍しい特徴を持つ北海道大学応援団に着目し、研究を行った。北海道大学応援団は長い歴史の中で、服装、活動内容などが大きく変化している。その変化の理由として、応援団の活動における特性から、周囲の学生との関係が応援団に変化をもたらしたのではないかと考えた。そのため、周囲の学生との関係の変化を軸に、応援団がどのような変化をしたのかについて考察してきた。

これまで、明治時代から始まる北海道大学応援団の長い歴史を見てきて、応援団は大きく5つの段階に分けられると考えている。そしてその変化を起こした要因として、優位の学生との関係が存在していることが分かった。

1つ目は結成初期の自然発生的な応援団である。この時期の応援団は組織的に非常に緩い存在であり、誰が団員であるかどうか分かっていないようなものがいた。予科生と団員の区別はほとんどなく、広く薄い組織であったといえよう。応援方法についても、野次や太鼓を打ち鳴らし、寮歌を皆で歌うことがメインであった。しかし、予科生のスポーツ熱が高かったこと、学校対抗の定期戦が始まり、予科内での結束意識が高まったことなどから少しずつ応援団は組織的、精神的に発展していく。応援団内でもさらに予科生の結成をためる必要があると述べており、応援団がさらに発展していく前段階がこの段階である。

2つ目は予科生の代表としての応援団である。組織的、精神的に発展していく中で、応援団は予科生全員を団員とし、予科生＝応援団という体制を築き上げる。この中で応援団は、団長が全予科生から、幹部が各クラスなどから選挙で選ばれていたため、応援団団長・幹部たちは予科内の代表的な人物になることが多く、そのため応援団は予科の代表的な側面を持っていた。さらに服装などに関しては、当時の一般的な服装である学ラン、もしくは羽織などで応援をしていた。この時代、特段服装などに決まりはなく、学帽や、リーダー旗、などを身に着けていたと考えられる。今現在まで続く弊衣破帽や長髪長髭というバンカラ文化はこの時に生まれたものであり、今後の応援団で予科の文化を引き継いでいくというのはこの時期までの予科応援団をさしている。

3つ目は恵迪寮専属応援団である。予科応援団が解散後、北海道大学応援団として結成されるも、商大戦のための応援団であったため、その目的は商大戦応援であり、予科の文化を引き継いでいくこととなった。しかし、学生の気質が変化したこと、羽織や学ランが一般的な服装ではなくなり始めたこと、予科が消滅し、応援団が幹部、団長などの中心人物たちだけをさして応援団となったことなどから応援団は次第に周囲と乖離していくこととなる。その解決策として応援団は予科の文化を色濃く残していた恵迪寮へと帰属していく。

この時の応援団は、活動内容はほぼ寮内の行事（商大戦を含む）のみであり、応援などはほとんど行っていなかった。そのため、応援団の活動は応援団としての生活ぶりといった内面的なものが重視されることとなる。

4つ目は全学的応援団である。恵迪寮専属応援団の状態から脱却し、「校風意気の掲揚」を掲げ、全学的応援団を目指す中で、その一つ目の段階として応援というものに力を入れる

ようになる。応援に力を入れ、スポーツを通じて北大内に潑刺とした雰囲気を送り込もうとしたのである。その中でブラスバンド部の設立、七大学戦の開始などを行うが、その中で大きな障壁となったのがこれまでの予科応援団としての姿である。弊衣破帽、長髪長髭の姿が、応援団を予科応援団時代のバンカラ文化の継承者として認識させ、団内外共に今農園団へのイメージが変わらなかったのである。

この改善策として、これまでの羽織袴スタイルから学ラン、白手の学生服スタイルへと域に服装を変更する。しかし、商大戦のため寮歌部という形で弊衣破帽、長髪長髭のスタイルは残り、1、2年生が羽織袴を着て髪や髭を伸ばし、3年生以降は髪を切るという形になる。また、応援活動に注力し、人数を増やし活動の幅を広げるため、2年制であった活動が3年制、4年制と変動する。

このようにして大きな改革を行った応援団は、精力的に応援活動を行っていく。関わる部活動数や応援の内容の充実など、様々な点で応援活動を拡充していくのである。この時に部活生との交流を深めるという意味合いでコンパも行われるようになっていた。さらに形骸化しており、「対面式」のみが残っていた商大戦の再建も行うようになる。商大戦を再建し、再び総合対校戦としての役割をもたせようとしたのである。

5つ目は今現在の応援団である。目指す姿は4つ目の全学的応援団と変わってはならず、「北海道大学を盛り上げる」という考えの元行動しているが、それ以外の面で変化が生じている。特に注目したいのは商大戦の立ち位置の変化、また「ボロ羽織」という概念の誕生である。

商大戦はこれまで応援団の活動の中心であり、最も重要視されている活動であった。しかし、今現在はもちろん重要視はされているが、絶対的な1番ではなくなっている。この理由として、大きく二つの理由が考えられる。一つは商大戦の断絶であり、もう一つは七大学戦やそのほかの競技応援の存在である。商大戦が小樽商科大学応援団の断絶によりなくなってしまった結果、応援団は七大学での総合対校戦である七大学戦や、春秋リーグの応援などそのほかの応援にさらに注力するようになる。そのため、商大戦が復活した際にはすでにそれ以外の応援が盛んであり、商大戦はいくつかある重要な行事の一つになったのである。

また、「ボロ羽織」という存在が生まれたことも特徴である。ボロ羽織は応援団構造改革時に誕生した寮歌部から来ている。しかし平成初期の段階までボロ羽織という言葉は存在せず、平成に入ってから急に誕生した言葉である。この言葉が誕生した理由として、応援数が増加し、繕ってきた羽織の劣化が進み、原形がなくなっていく中で、予科文化の象徴として強調させる狙いがあったと考える。あえて「ボロ」と名前を付け、羽織もより継ぎはぎが多いデフォルメ化されたものにするすることで、応援団の歴史と予科のバンカラ文化を引き継ぐ存在としての立ち位置を明確にしていたのである。

これまで100年を超える歴史の中で応援団は大きく変化をしてきた。そして、その変化は周囲の学生との関係が変化する中で、応援団が時代に適合し、生き残っていくための変化であることが分かった。予科の文化をアイデンティティとして大切にしながらも、単なる競技

応援ではなく、全学的応援団を目指す中で、さまざまな挑戦を行ってきたのである。今現在も応援団は存続しているが、今現在、応援団が学内全体への影響力を持っているかといわれるとそうではない。関係する団体は部活動がメインでそのほかの学生へのアプローチは少なく、ボロ羽織の姿に眉を顰める人も存在している。明治時代から歌われ続けている明治45年度寮歌「都ぞ弥生」も覚えていない学生のほうが多い。さらに平成に入ってから、団員数の低下も大きな問題となっている。各代1〜4人程度がほとんどで、4学年合わせても10名弱というのが今の応援団の現状である。これでは大学全体に影響を与えるような活動をしていくのは厳しい。

このような時代の中で北海道大学応援団はまた新しい形を模索していくべき時なのではないかと考えている。周囲の学生と今現在の自分たちの立ち位置をしっかりと見据え、これまでの形式に惑わされず、よりよい応援団の形を常に求め続けていくことこそが北海道大学応援団の伝統であると考えている。

参考文献

- ・ 谷口哲也 (1978) 『應援團史』 北海道大学応援団発行
- ・ ——— (2009) 『青春興亡の百年・ 応援団概史』 北海道大学応援団発行
- ・ ——— (2011) 『北海道大学応援団 100 年記念史』 北海道大学応援団発行
- ・ 丹羽典生 (2018) 「日本における応援組織の発展と現状 ―四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論―」 『国立民族学博物館研究報告』 43(2):189-268
- ・ 丹羽典生 (2020) 『応援の人類学』 青弓社
- ・ 北海道大学応援団会議レジメ (部室内保管)
- ・ 北海道大学応援団団内発行団誌『蠻聲(ばんせい)』

参考 HP

- ・ 大阪大学応援団公式 HP URL <https://www.oucp1962.com/>
- ・ 九州大学応援団公式 HP URL <https://qdaiendan.kachoufuugetu.net/>
- ・ 京都大学応援団公式 HP URL <https://kyo-dark.sakura.ne.jp/>
- ・ 東京大学運動会応援部公式 HP URL <https://www.todai-ouen.com/>
- ・ 東北大学学友会応援団公式 HP URL <https://tohokuohen.wixsite.com/tompendan>
- ・ 北海道大学 HP 北海道大学 概要 2024

URL https://www.hokudai.ac.jp/introduction/pdf/20240726_gaiyou.pdf

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご支援いただきました。

本研究のために調査にご協力いただいた各 OB のみなさまに心から感謝いたします。

中間報告では、宮内泰介教授、笹岡正俊教授、橋本雄一教授、立澤史郎助教授、林涿也准教授、高橋昂輝准教授、上野真由美准教授より、貴重なご指導とご助言を賜りました。感謝申し上げます。

指導教員である宮内泰介教授には、研究の着想から、調査、論文執筆まで多くのご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

最後に、資料の搜索にご協力いただいた応援団現役諸君らにも、お礼申し上げます。

ありがとうございました。